

花巻市博物館

研 究 紀 要

—第 17 号—

目 次

稗貫・和賀地域における奥州藤原氏時代の遺跡 村 田 淳 (3)

多田等観の花巻における足跡 ― 日記、『観音堂記録』、書簡から ― (1)
..... 松橋 香澄 (15)

「桜の地蔵さん」について 布臺 一郎 (25)

斎藤宗次郎の日記と自叙伝に関する考察

― 大正元年(1912) 8 月19日の記事を例として ― 小田島智恵 (29)

令和 4 (2022) 年 3 月

序

花巻市博物館は、平成16年の開館以来、地域における社会教育機関として、資料収集及び保管、調査研究、展示、教育普及の活動を行ってまいりました。これらの活動は、広く教育・学術および文化の発展に貢献するものでありますが、とりわけ調査研究活動は、他の活動の基盤となるものであります。

本研究紀要には、考古分野1編、歴史分野3編の論考を収録しました。いずれも、他の活動に従事している中でまとめたものであり、必ずしも十分とはいえませんが、今後とも調査研究活動の一層の充実を図り、地域文化の向上と発展に役立つよう努力してまいりたいと考えております。

最後に、ご協力をいただきました皆様に対し厚く御礼申し上げますとともに、真摯なご批判と一層のご指導・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和4年3月

花巻市博物館

館長 高橋 信雄

稗貫・和賀地域における奥州藤原氏時代の遺跡

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 村 田 淳

はじめに

筆者は奥州藤原氏の支配あるいは文化圏の拡がりを解明することを目的として、これまでに岩手県南部の胆江地域及び三陸沿岸地域において12世紀の遺構・遺物が検出された遺跡について集成と検討を行ってきた(村田2014・2016・2019)。

本稿で対象とする稗貫・和賀地域(郡)とは、『陸奥話記』・『吾妻鏡』等の古記録に記されている「奥六郡」を構成する郡のことを指す。奥六郡の成立時期の詳細は不明であるが、平安時代中期(10世紀中葉か)以降に呼ばれるようになったと推定されており、12世紀には奥州藤原氏の所領であったと考えられている(註1)。近年の平泉関連の研究では、奥六郡のうち志和郡に位置する紫波町比爪館遺跡が奥州藤原氏の第二の拠点と考えられるようになるなど(羽柴2020)、平泉中心部以外での同時代の地域様相が次第に明らかとなってきた。

稗貫・和賀地域(稗抜・和賀)は胆江地域(井澤・江刺)と同じく奥六郡内では平泉と比爪の間に位置する地域であり、当然奥州藤原氏の支配領域の中にあつたと考えられる。当地域では、古くから経塚をはじめとして12世紀代の遺構・遺物は認識されていたが(日本考古学協会2001他)、地域全体を対象とした研究がほとんどないことから、本稿はその前段階として奥州藤原氏時代の遺跡内容の整理を目的として作成した。

1. 対象地域・年代

今回対象とする地域は、稗貫郡・和賀郡のうち、現在の花巻市・北上市域及び西和賀町域に含まれる範囲とした。その為、北上市の稲瀬地区及び口内地区は本来江刺郡に含まれる地域であるが、この地区も今回の対象地域に含めている。一方、金ヶ崎町六原地区は和賀郡に含まれる地域であるが、前稿(村田2014・2019)で胆江地域を対象とした際に含めていることから今回は除外した。

対象とする年代は、前稿(村田2014・2019)では12世紀代のみとしていたが、稗貫・

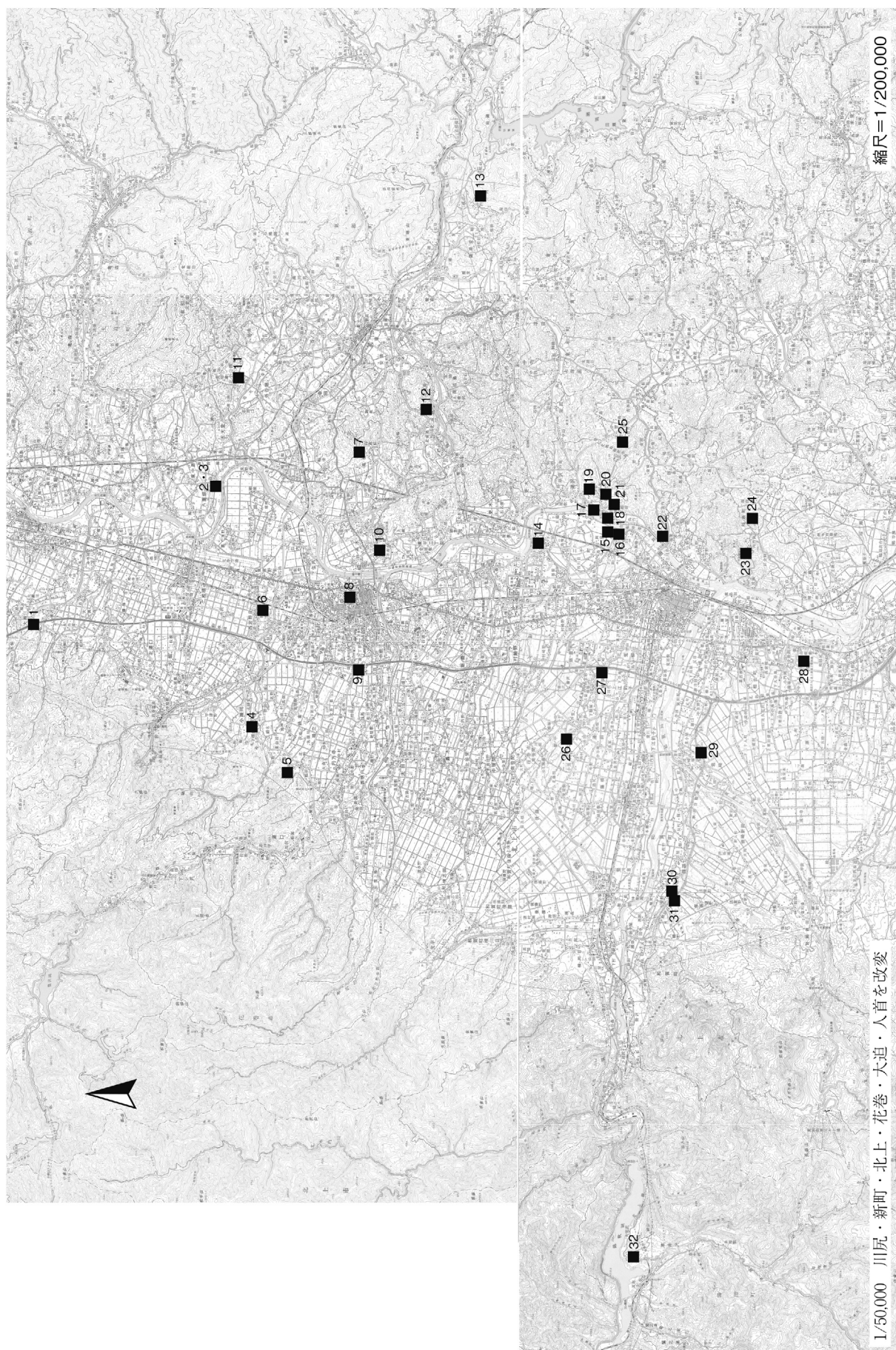
和賀地域では土器を中心として11世紀代の遺物の出土も多く、かつ12世紀初頭との区別が困難なものも含まれることから、本稿では11世紀中葉～12世紀全般を対象とした。一方で、陶磁器については12世紀後半～13世紀前半に属するものもあり、一部の遺跡についてはこれも含めている。

2. 遺跡の分布状況

32遺跡で11～12世紀代の遺構・遺物を確認した(第1図、第1表)(註2)。自治体ごとの遺跡数をみると、花巻市が13遺跡、北上市が18遺跡、西和賀町が1遺跡である。平成の市町村合併前の行政区ごとにみると、花巻市では旧花巻市域で7遺跡、旧石鳥谷町域で3遺跡、旧東和町域で3遺跡であり、現在のところ旧大迫町域での出土は確認されていない。宿遺跡と蛇蜒蛆(じゃのめり)遺跡(第1表2・3、以下遺跡番号のみ記載)が隣接する以外は散在的な分布状況である。北上市では旧北上市域で13遺跡、旧江釣子村域で2遺跡、旧和賀町域で3遺跡である。主要河川である北上川と和賀川の流域に分布する傾向があり、特に北上川東岸の黒岩地区やその対岸の二子地区に集中する。一方で、花巻市域では南西部の笹間地区周辺、北上市域では西部の横川目地区周辺では確認されていない。西和賀町では現在のところ錦秋湖の南岸に位置する峠山牧場Ⅰ遺跡(32)のみであり、分布傾向は不明である。

3. 出土遺物

遺構内からの出土が22遺跡あるが、中世の塚構築土や土坑堆積土等、時代の新しい遺構から出土する事例もある。また、耕作中等の不時発見により出土地点が不明なものも多い。遺物の種別としては土器・国産陶器・輸入陶磁器・金属製品・その他があり、単独の種別のみが出土した遺跡が19遺跡、複数の種別が出土した遺跡が13遺跡である。以下では種別ごとに出土傾向をみていく。



第1図 出土遺跡分布図

第1表 出土遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	検出遺構・遺物出土地点	遺物					備考	文献
				土器	国産	輸入	金属	その他		
1	大瀬川B	花巻市石鳥谷町大瀬川	塚状遺構(2号マウンド)		○				周溝と構築土から出土	1
2	宿	花巻市石鳥谷町八重畑	土坑(SK1)、溝(16号溝)、柱穴、遺構外	△					11世紀中葉と12世紀後葉	2・3
3	蛇蛭蛆(じゃのめり)	花巻市石鳥谷町八重畑	堅穴遺構(SX1)、土坑(SK1・2・3・4)、遺構外	●					11世紀中葉	3
4	小瀬川	花巻市小瀬川	出土地点の詳細不明		○				12世紀末～13世紀初頭	4
5	円万寺館	花巻市円万寺	柱穴	○	○		○		12世紀後半、中世の塚構築土から出土	5
6	先屋	花巻市西宮野目	土坑(14s-1土坑)、柱穴		○				鎌倉初期の五輪塔現存	6
7	高松山経塚群	花巻市高松	出土地点の詳細不明		○	○			経塚3基	7
8	花巻城	花巻市内ほか	溝(VCf大溝)、井戸(1号井戸)、池(A区園池状)、土塁、柱穴、遺構外	●	○				土器は11世紀後葉、陶磁器は12～13世紀代	9～14
9	万丁目	花巻市南万丁目	土坑(SK06・62)	○	○	○				15・16
10	高木中館	花巻市高木	土坑(SK02)			○	○		白磁甕はⅢ系、土坑から焼骨片出土、再葬墓か	17
11	真行寺経塚	花巻市東和町北小山田	出土地点の詳細不明		○					8
12	三熊野神社毘沙門山経塚群	花巻市東和町土沢	出土地点の詳細不明	○	○		○	○	経塚4基、12世紀後半代	8
13	丹内山神社経塚	花巻市東和町谷内	経塚(1・2号経塚)		○	○	○	○	2号経塚は12世紀後半代、1号経塚は12世紀末～13世紀代	18
14	成田岩田堂館	北上市成田	不明遺構(SX06)	●					11世紀後葉か、詳細時期不明	19
15	中村	北上市二子町	掘立柱建物(SB01・02)				○	○	鉄生産関連の工房	20
16	千荷	北上市二子町	堅穴建物(SI81・89)、掘立柱建物(SB07・08・09・10)、土坑(SK133・134)、溝(SD30・35～47・49・51)、遺構外	○	○	○			堅穴建物は8～9世紀代、遺物が出土した溝はSD30・35・38・42・43・51の6条	21
17	黒岩城	北上市黒岩	掘立柱建物(SB010)、溝(SD001)、堀(SD020)、柱穴、遺構外	◎	○				本調査2回、土器総破片数595点、中世土坑からも出土	22・23
18	黒岩宿	北上市黒岩	トレンチ調査	●	○		○		土器は11世紀後葉、陶磁器は12世紀代	24
19	鴻巣I(白山堂山頂)	北上市黒岩	遺構外	◎						25
20	白山廃寺	北上市黒岩	礎石建物(第一号堂跡)	△					遺物出土地点の詳細不明、11世紀後葉と12世紀中～後葉	26
21	菅田	北上市黒岩	土坑(SK033・086)、溝(SD041)、柱穴	◎						27
22	横町	北上市立花	礎石建物(SB810)、落ち込み遺構(SX595)	◎						28
23	国見山廃寺	北上市稲瀬町	堅穴建物(SI092)、礎石建物(SB011)、整地層、遺構外	△	○	○			11世紀後葉と12世紀中～後葉	29・30
24	八王子森	北上市稲瀬町	出土地点の詳細不明		○				八坂神社境内	31
25	水押西II(新山神社)	北上市口内町	出土地点の詳細不明	○	○				新山神社境内	32
26	新平	北上市新平	遺構外		○	○			白磁甕はⅢ系、常滑は須恵器として報告	33・34
27	鳩岡崎三館	北上市鳩岡崎	柱穴			○			12世紀後半～13世紀初頭	35
28	南部工業団地 K区	北上市相去町	塚(K201～206・211塚)		○				遺物の出土はK205塚のみ、12世紀後半	36
29	岩崎台地	北上市和賀町	堅穴建物(BXⅢe22住居)	●			○		11世紀後葉	37
30	上須々館	北上市和賀町	経塚(SX001・002塚)、土壇状遺構(SX025) 遺構外		○		○	○	12世紀末	38
31	本郷	北上市和賀町	塚(IA-1塚)			○			古期の塚構築土上部から出土、同一個体片7点	39
32	峠山牧場I A地区	西和賀町湯田	出土地点の詳細不明	○					文章記載のみ	40

※土器欄の○は12世紀代、●は11世紀代、◎は11世紀後葉～12世紀初、△は11・12世紀代両方の出土を指す

土器

18遺跡で出土している(総遺跡数の56%)。年代的には大きく11世紀中葉(①期)、11世紀後葉(②期)、11世紀後葉～12世紀初頭(③期)、12世紀中～後葉(④期)に分けられる(第2図)。(①期は碗と小皿という器種の大小セットが確立される時期であり(井上2010)、器壁が厚く色調が橙色であることが特徴である。出土遺跡は宿遺跡・蛇蛭蛆遺跡の2遺跡で、堅穴遺構や土坑から出土している(第2・3図)。(②期は碗・小皿に加えて柱状高台が新たに加わる時期で、碗・小皿も①期に比べて器高が低く扁平になる(小野寺2004)。出土遺跡は5遺跡で、黒岩宿遺跡(18)や白山廃寺跡(20)で碗と小皿、成田岩田堂館跡(14)で高台坏(中実タイプ)、岩崎台地遺跡群(29)で柱状高台が出土している(註3)。

③期はいずれの器種も②期よりも小型化する時期である。出土遺跡は5遺跡あるが、いずれも北上市域の北上川東岸に位置する。器種は碗と小皿が主体であり、それに加えて黒岩城跡(17)では内外面黒色処理の碗(第2図)、横町遺跡(22)で内面黒色処理の碗(井上ほか2011)、菅田遺跡(21)と国見山廃寺跡(23)で柱状高台が出土している。(④期はロクロかわらけと手づくねかわらけで構成される時期であり、平泉町柳之御所遺跡をはじめとする平泉遺跡群で出土量が最も多い時期である。稗貫・和賀地域でも出土遺跡は7遺跡と最も多く、分布も西和賀町まで拡大する。ただし、1遺跡あたりの出土量は国見山廃寺跡で50点弱出土している以外は10点以下の出土である。なお、③期と④期の間の時期である12世紀前葉に属する土器は現在のところ稗貫・和賀地

第2表 出土遺物組成一覧

No	遺跡名	土器		国産陶器				輸入陶磁器			金属		その他	種別内訳 (点数は報告書記載の個体数又は破片数)
		碗皿	他	碗皿	壺	甕	鉢	碗皿	壺	他	製品	銭貨		
1	大瀬川B				○									常滑 (三筋壺1)
2	宿	○												土師器 (碗41・小皿2)、かわらけ (ロクロ1)
3	蛇姫組 (じゃのめり)	○												土師器 (碗37・小皿19・皿1)
4	小瀬川				○									須恵器系 (波状文壺1)
5	円万寺館	○				○						○		かわらけ (手づくね1)、常滑 (甕1)、銭 (元豊通宝1)
6	先屋				○	○								渥美 (甕9)、常滑 (壺1・甕17)
7	高松山経塚群				○	○	○		○					渥美 (片口鉢1)、常滑 (三筋壺1・甕1)、白磁 (四耳壺1)
8	花巻城	○			○	○								土師器 (碗1)、渥美 (壺1)、常滑 (甕5)、不明陶器 (甕2)
9	万丁目	○				○				○				かわらけ (ロクロ3・手づくね2)、常滑 (甕1)、青白磁 (小壺1)
10	高木中館								○		○			白磁 (壺1)、金属 (鎌1、小刀2、釘1)
11	真行寺経塚				○									常滑 (三筋壺1)
12	三熊野神社毘沙門山経塚群	○			○						○		○	土器 (皿1)、常滑 (三筋壺1)、金属 (草花蝶鳥鏡1・萩飛鳥鏡1・刀1・鎌1)、石櫃、経筒 (銅製1・陶製1)
13	丹内山神社経塚								○		○	○	○	白磁 (四耳壺1)、金属 (湖州鏡1)、銭 (北宋銭17・南宋銭1・南唐銭1)、石製経筒1
14	成田岩田堂館	○												土師器 (坏3・高台坏3)
15	中村										○	○	○	金属 (釘1・環状2・棒状2)、銭 (熙寧元宝1)、鉄生産関連 (羽口3・埴塙1・鍛造剥片・粒状滓など)
16	千苅	○			○	○		○						かわらけ (手づくね1)、渥美 (壺5・甕3)、常滑 (甕17)、白磁 (碗1)、青磁 (碗1)
17	黒岩城	○			○									土師器 (碗3、黒色碗2、小皿49)、かわらけ (手づくね2)、渥美 (壺1)
18	黒岩宿	○			○	○						○		かわらけ (ロクロ7・手づくね1)、常滑 (壺3・甕6)、銭 (元豊通宝1)
19	鴻巣I (白山山頂)	○												土師器 (碗10・小皿50・柱状高台3)
20	白山廃寺	○												土師器 (柱状高台8)、かわらけ (ロクロ1・手づくね2)
21	菅田	○												土師器 (小皿3・柱状高台3)
22	横町	○												土師器 (小皿2)
23	国見山廃寺	○			○	○		○						土師器 (小皿5、柱状高台1)、かわらけ (ロクロ29・手づくね18)、渥美 (壺1)、常滑 (三筋壺1・壺2・甕8・片口鉢2)、白磁 (碗1)
24	八王子森				○									常滑 (三筋壺1)
25	水押西Ⅱ (新山神社)		○		○									土器 (壺1・蓋1)、常滑 (三筋壺1)
26	新平				○				○					常滑 (三筋壺1)、白磁 (壺1)
27	鳩岡崎三館							○						白磁 (皿1)
28	南部工業団地 K区				○									渥美 (壺1)
29	岩崎台地	○									○			土器 (柱状高台4、不明1)、金属 (釘1)
30	上須々館				○						○		○	渥美 (壺2)・常滑 (三筋壺1)・須恵器系 (壺1)、金属 (鉄器1、墨書礫1)
31	本郷								○					白磁 (四耳壺1)
32	峠山牧場I A地区	○												かわらけ (手づくね1)

域での出土は確認されていない。

この他、三熊野神社毘沙門山経塚群 (12) では4基の経塚のうち北側に位置する1基から蓋として使用されたと考えられる土製皿が1点 (12世紀後半か)、また水押西Ⅱ遺跡 (25) では蔵骨器の可能性のある土師質の壺と蓋が各1点出土している。

国産陶器

19遺跡で出土している (総遺跡数の59%)。産地別の出土遺跡数は、渥美窯産8遺跡・常滑窯産15遺跡・須恵器系陶器 (珠洲産か) 2遺跡・産地不明1遺跡である。また、6遺跡では複数の産地の陶器が出土している。器種は、渥美窯・常滑産は壺・甕・片口鉢、須恵器系は壺、産地不明は壺と経筒がある。破片数としては大型の器種である甕が多いが、個体数では壺が最も多く、特に常滑窯産三筋文壺は高松山経塚群 (7)・真行寺経塚 (11)・八王子森遺跡 (24)・上須々孫館跡 (30、第

4図)等9遺跡で出土している。経筒は三熊野神社毘沙門山経塚群の北経塚から1点出土している (第7図)。底部は静止糸切りで、胴部に浅い沈線が3条巡らされる。陶磁器の年代は、遺存状況の良い壺類は12世紀後半代に比定できるものが多いが、甕類は胴部破片が多い為、12世紀後半～13世紀代と幅広い年代しか比定できない。経筒は相伴遺物から12世紀後半代と考えられる。

輸入陶磁器

9遺跡で出土している (総遺跡数の28%)。種類別の出土遺跡数は、白磁8遺跡、青磁・青白磁各1遺跡である。複数の種別が出土した遺跡は確認されていない。白磁は千苅遺跡 (16)と国見山廃寺跡で碗、鳩岡崎三館遺跡で皿、高松山経塚群・高木中館遺跡 (10)・丹内山神社経塚 (13)・新平遺跡 (26)・本郷遺跡 (31)で四耳壺を含む壺類が出土している。壺のうち、高松山経塚群・高木中館遺跡・

丹内山神社経塚西経塚・新平遺跡例は大宰府分類の白磁壺Ⅲ系と考えられる。

青磁は、千苺遺跡の蓮弁文碗の体部破片1点のみである。

青白磁は、万丁目遺跡(9)の蓋付小壺の体部破片1点のみである。

金属製品

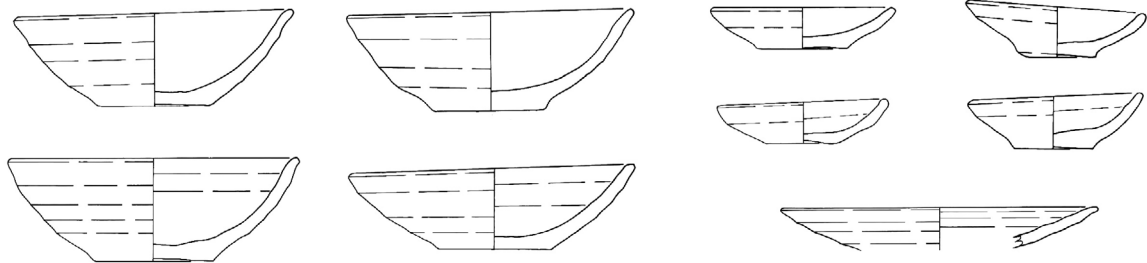
鉄製品と銅製品があり、8遺跡で出土している(総遺跡数の22%)¹⁾(註4)。鉄製品は高木中館遺跡(第4図)や三熊野神社毘沙門山経塚群で刀(小刀)や鎌、上須々孫館跡で磬(第6図)が出土している。銅製品は鏡と銭貨、経筒があり、鏡は2遺跡、銭貨は4遺跡、経筒は1遺跡で出土している。鏡は三熊野神社毘沙門山経塚群で草花蝶鳥鏡と荻飛鳥

鏡、丹内山神社経塚で湖州鏡が出土している。銭貨は円万寺館遺跡(5)と黒岩宿遺跡で元豊通宝、中村遺跡(15)で熙寧元宝が各1点出土しているが、特に丹内山神社経塚は点数が多く、3基の経塚から北宋銭(天聖元宝・熙寧元宝・紹聖元宝等)17枚、南宋銭(嘉泰通宝)1枚、南唐銭(開元通宝)1枚が出土している。経筒は、三熊野神社毘沙門山経塚群の北経塚で1点出土している。紐座を欠損しているが、蓋も残存している。

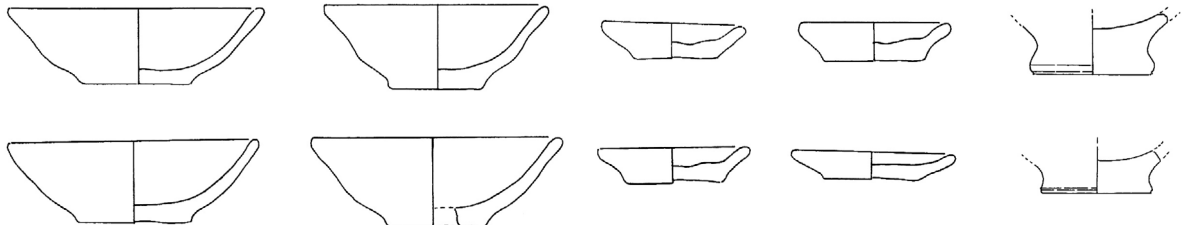
その他

三熊野神社毘沙門山経塚群の北経塚では経筒を納めるための方形の石櫃、丹内山神社経塚の東経塚で凝灰岩製の経筒、上須々孫館跡が墨書礫(「息」か)、中村遺跡で掘立柱建物

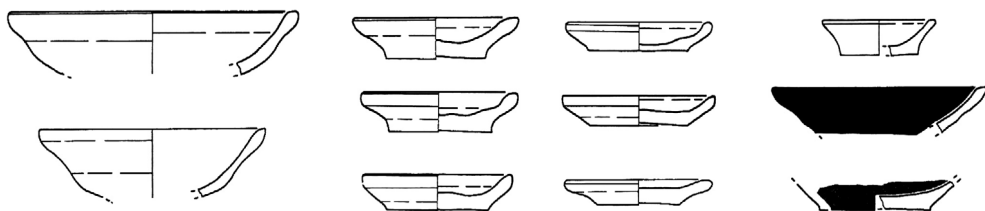
①期 11世紀中葉(蛇蛭蛆遺跡 SX1堅穴遺構)



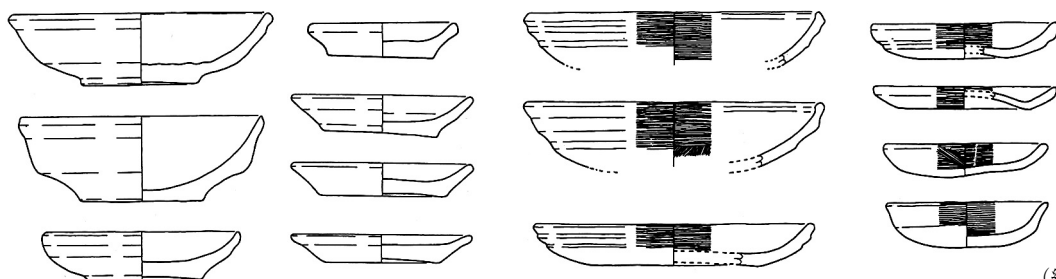
②期 11世紀後葉(鴻巣I遺跡 白山堂山頂)



③期 11世紀後葉～12世紀初頭(黒岩城跡 SB010-P10)



④期 12世紀中葉～後葉(国見山廃寺跡 第9次調査区)



(縮尺: 1/4)

第2図 11～12世紀の土器

式の工房から鉄生産関連遺物（羽口・坩堝・鍛造剥片・粒状滓等）が出土している。

4. 検出遺構

遺物が出土して年代が特定できるもの、及び出土遺物は無いが形態から11～12世紀代と推定できる遺構が検出された遺跡は22遺跡である（総遺跡数の69%）。種別は多様であるが、以下では複数の遺跡で検出された遺構についてみていく。

竪穴建物

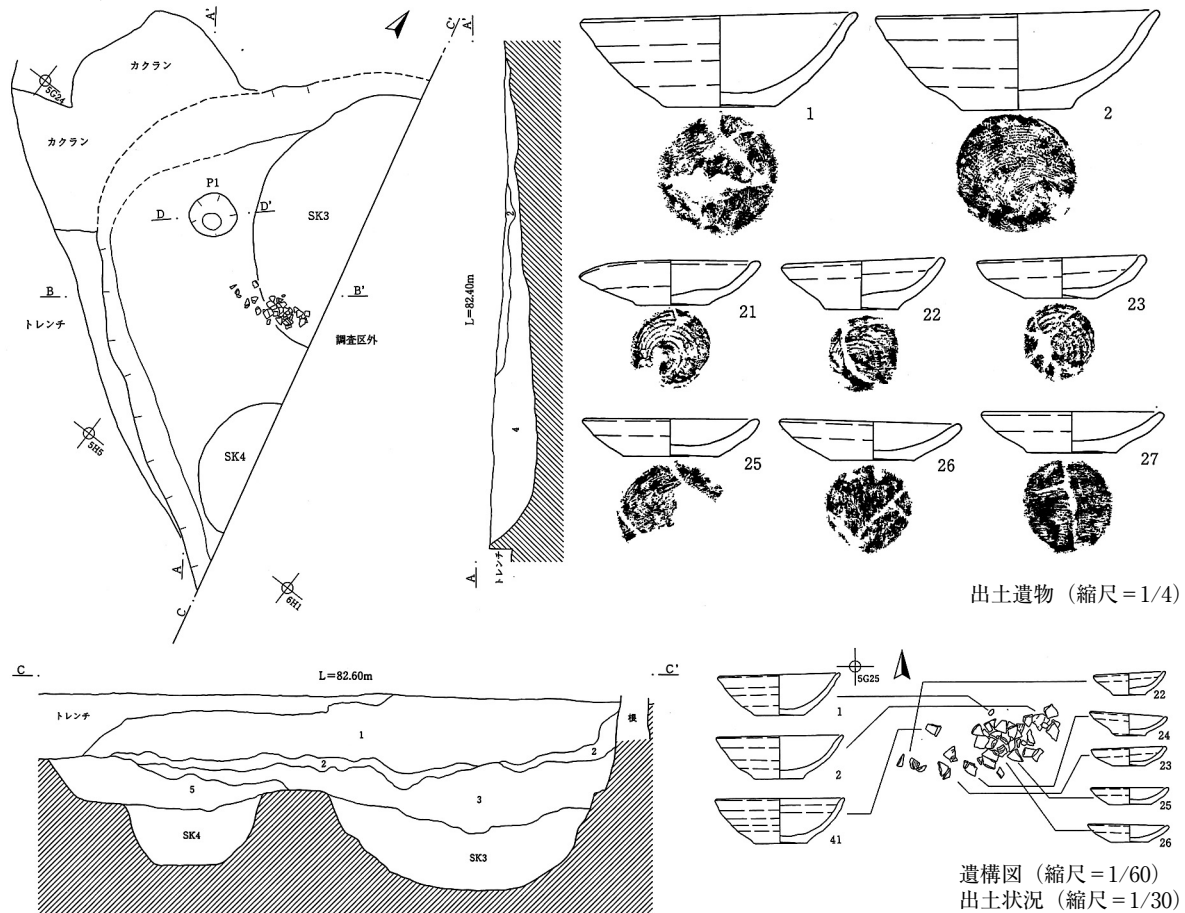
蛇蛭蛆遺跡で1軒、千苺遺跡で2軒、岩崎台地遺跡で1軒の計4軒検出されている。ただし、千苺遺跡の2軒（SI81・89）はカマドを有する8～9世紀代に属する建物であり、遺物は流れ込みによるものと考えられる。蛇蛭蛆遺跡SX1竪穴遺構は東側が調査区外のため全形は不明であるが、一辺4m弱の隅丸方形のプランと考えられ、床面直上から①期（11世紀中葉）と考えられる土師器碗と小皿が破片数で522点出土している（第3図）。また、用途は不明であるが本建物の廃絶直後に土坑が2基（SK3・4）が掘削されており、それ

らから出土した破片とも接合関係にある。岩崎台地遺跡B X IIIe22住居跡は11世紀後葉に属する建物で、地床炉を有する一辺5m弱の方形プランで壁際に多数の柱穴が等間隔で配置されている。

掘立柱建物

中村遺跡で2棟、千苺遺跡で4棟、黒岩城跡で1棟の計7棟検出されている。中村遺跡SB01・02は直接重複する柱穴が無く新旧関係は不明であるが、建物の範囲内から複数の炉が検出され、熙寧元宝（初鑄年1068年）や鉄滓・坩堝片が散在していたことから工房と考えられる。建物を構成する柱穴からの遺物出土は無いが、銭貨の年代観から11～12世紀代と考えられる。黒岩城跡SB010は西側が調査区外に至る為全形は不明であるが、東西棟で柱穴（P010）から11世紀末～12世紀初頭の土師器碗・小皿が総数145点出土している（第2図）。千苺遺跡SB07～10は柱穴からの遺物出土は無いが、後述する12世紀後半代の区画溝の内部に位置することから同時期の建物と考えられる。SB07は東西棟で南北二面の庇付建物、SB08～10は東西棟で側柱

蛇蛭蛆遺跡 SX1竪穴遺構



第3図 出土遺跡の諸例(1)

のみの建物である。また、SB08～10は同一地点で建て替えが行われている。

礎石建物

白山廃寺跡・横町遺跡・国見山廃寺跡で各1棟の計3棟検出されている。遺構の性質上、直接的な遺物の出土は無いが、周辺から出土した遺物からいずれも11世紀後葉に属すると考えられている。白山廃寺第一号堂跡は七間四面庇一面孫庇付の建物で(杉本2020)、桁行約40m、梁間約21mと大規模な建物であり、中心仏堂と考えられる。横町遺跡SB810は五間一面庇付の建物で桁行約12m、梁間約6mと白山廃寺に比べて小型であるが、身舎の中央に須弥壇と考えられる礎石配置がみられることから「横町廃寺」と考えられている。国見山廃寺跡SB011は11世紀前半に焼失した中心仏堂の上に約1mの盛土を行った後に建てられた中心仏堂で、七間一面庇付の建物である(第4図上)。桁行約22m、梁間約8mで、国見山廃寺跡の建物の中で最大規模を誇る。

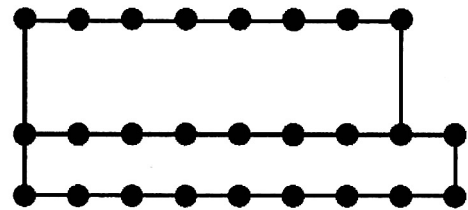
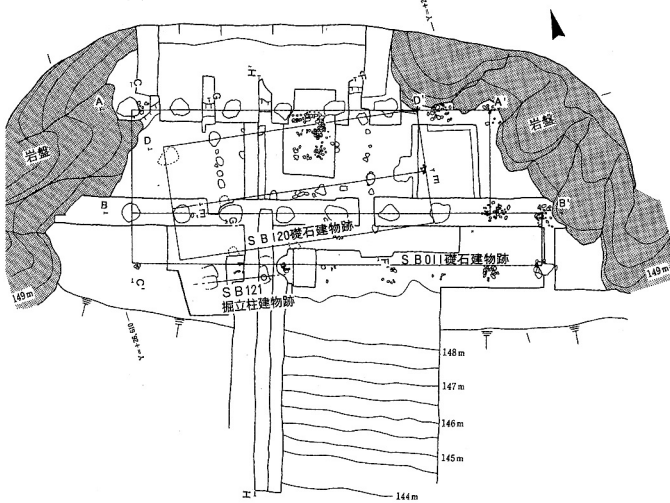
土 坑

7遺跡で計13基検出されている。ほとんどは堆積土中から遺物が出土したことからこの時期と推定されているものであり、性格について明らかなものは少ない。性格が推定できる土坑としては高木中館遺跡SK02がある(第4図下)。長軸1.8mの楕円形土坑で、堆積土中位の焼土層から白磁四耳壺や金属製品が出土している。また、下位の黒色土層からは焼骨片や炭化種子が出土していることから再葬墓と考えられる。黒色土層で検出された炭化物の放射性年代測定結果(840 ± 30 yrBP)及び白磁壺の年代観から12世紀前葉に属すると考えられる。

溝・堀

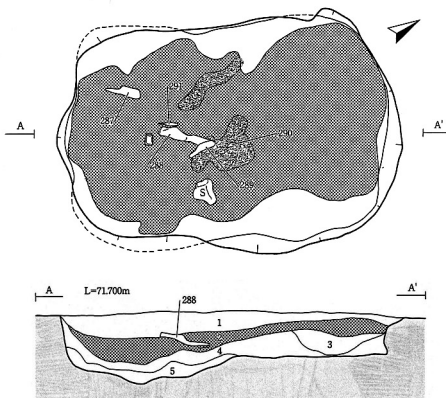
5遺跡で計21条検出されているが、このうち15条は千苺遺跡で検出されている。千苺遺跡では北西-南東方向に並行して走るSD30・35・38・42・47・51を主体としてそれに直交するSD43、南西隅で方形に巡るSD39により

国見山廃寺跡 SB011礎石建物

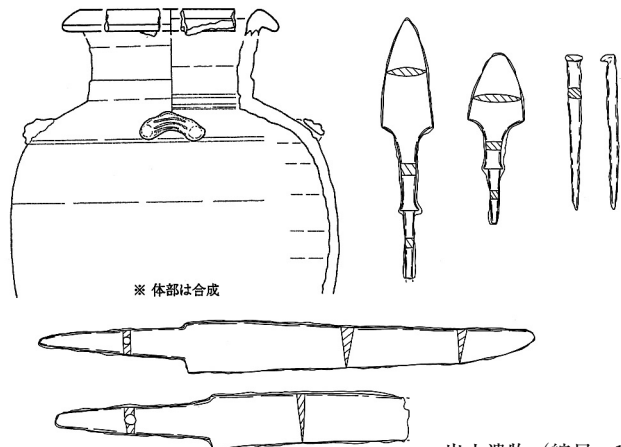


遺構図及び礎石配置図(縮尺=1/400)

高木中館遺跡 SK02



遺構図(縮尺=1/40)



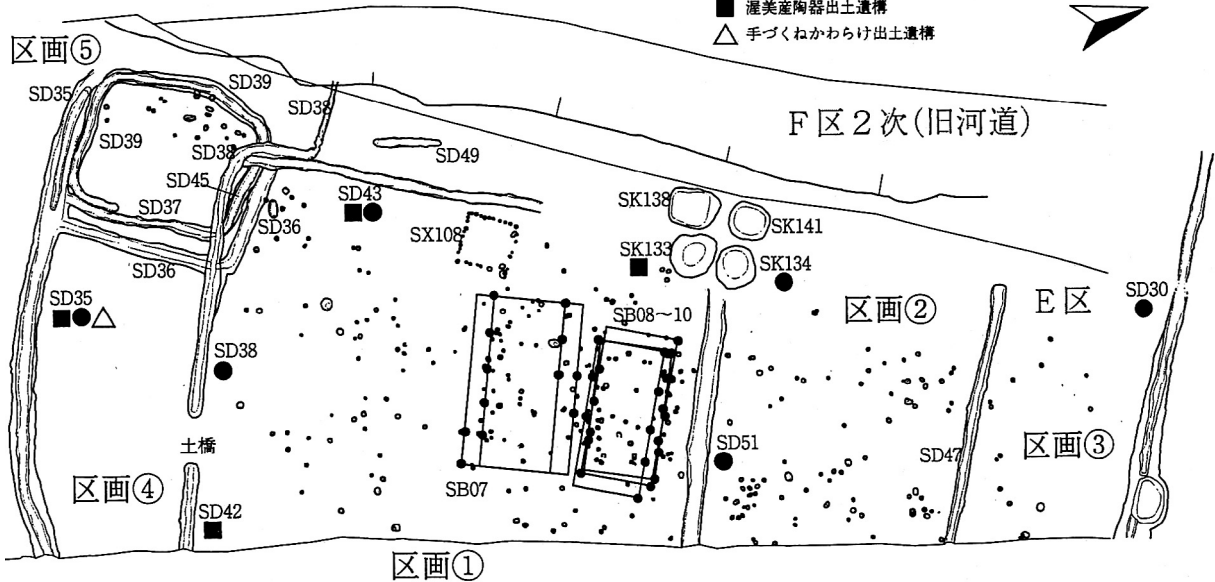
出土遺物(縮尺=1/4)

第4図 出土遺跡の諸例(2)

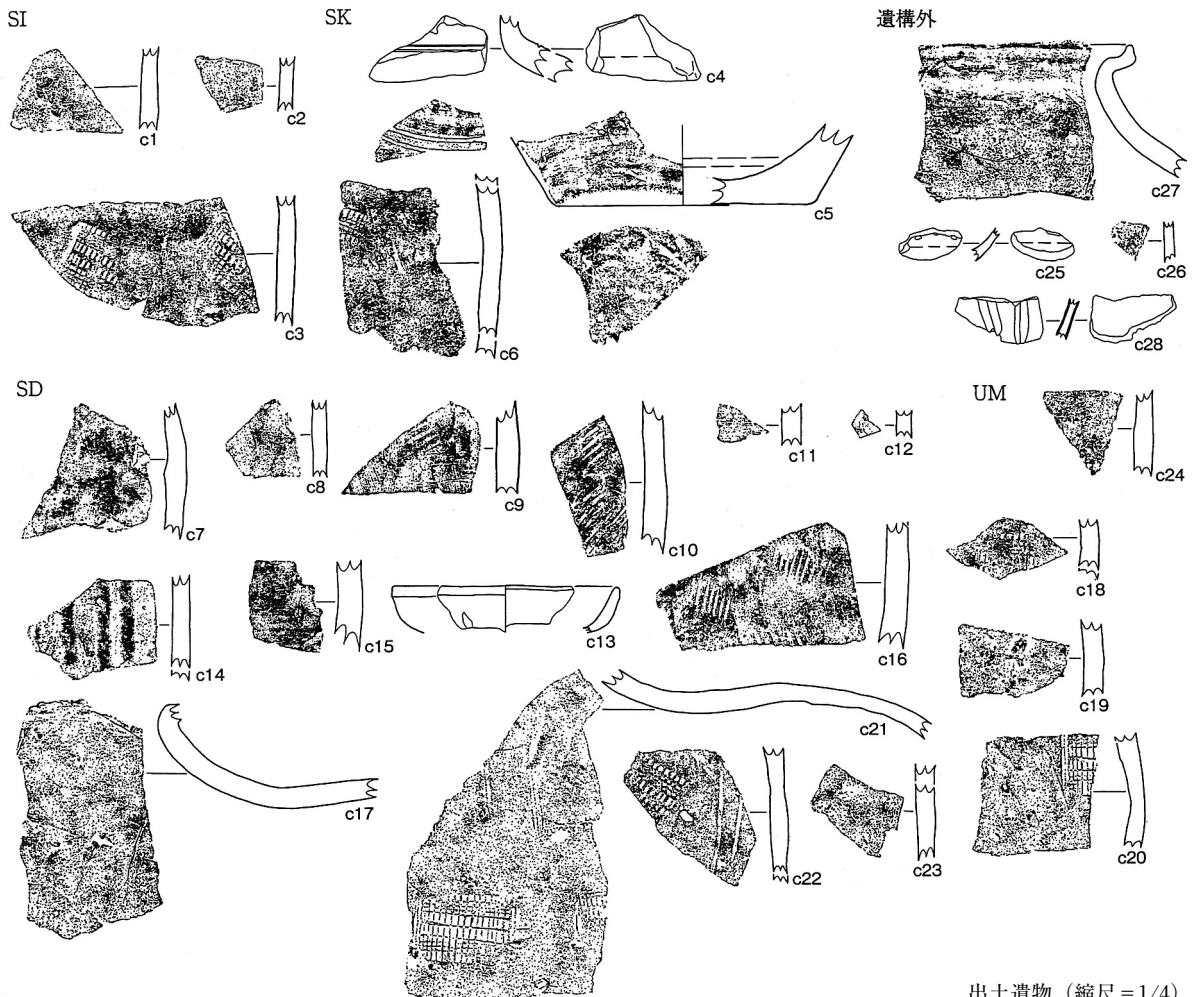
同時あるいは若干の時期差をもって掘削されたとすれば、溝で囲まれた区画が5箇所形成されていたと考えられる（第5図）。出土したかわらけと陶磁器類は12世紀後半代に属

するものであり、先述した竪穴建物（SI81・89）からの出土を除けばこの時期の遺物はほぼこの区画からの出土であることから、区画内にある遺構はおおむねこの時期に属す

千苺遺跡



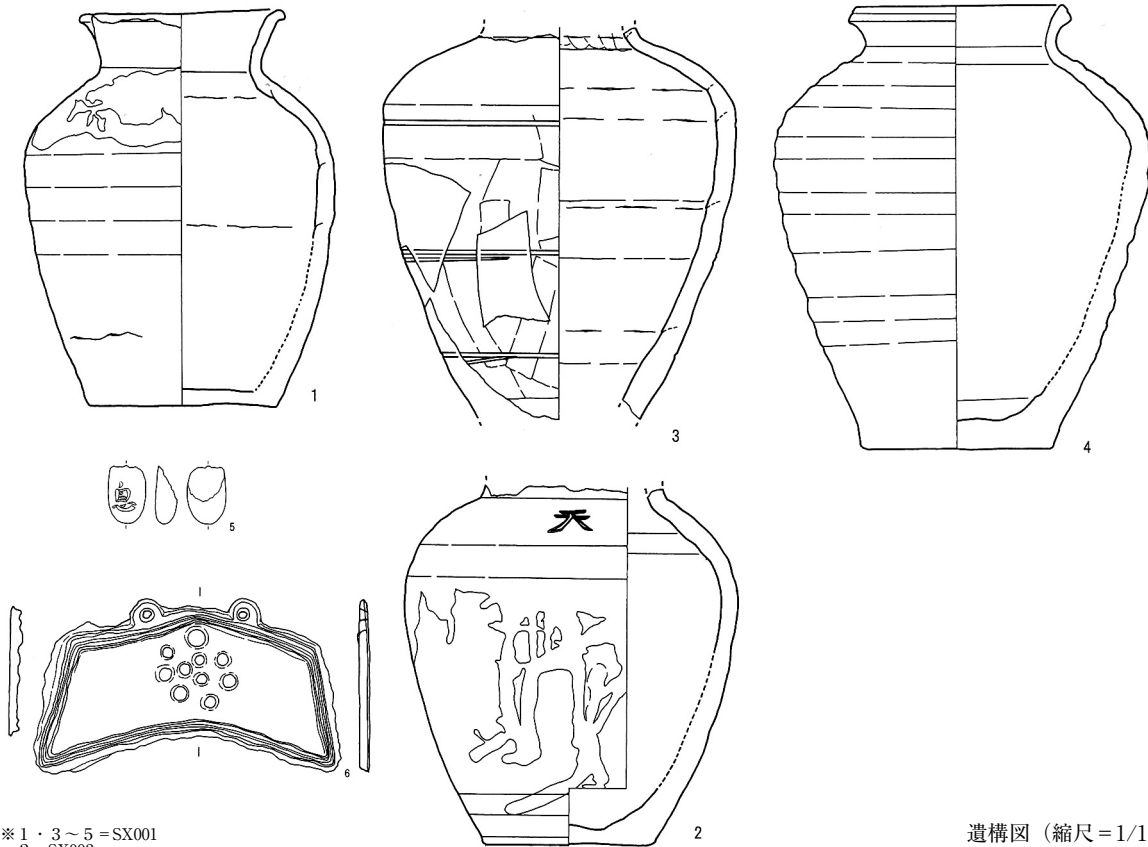
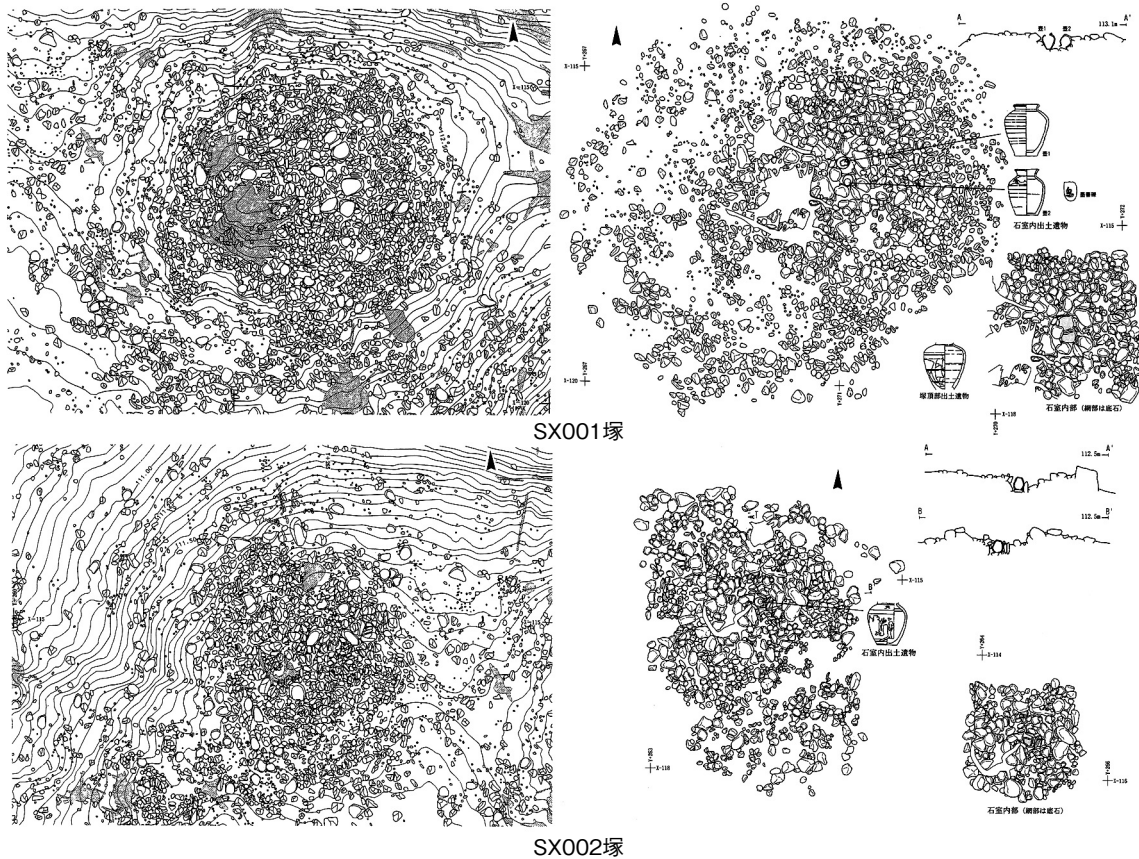
遺構配置図（縮尺=1/500）



出土遺物（縮尺=1/4）

第5図 出土遺跡の諸例(3)

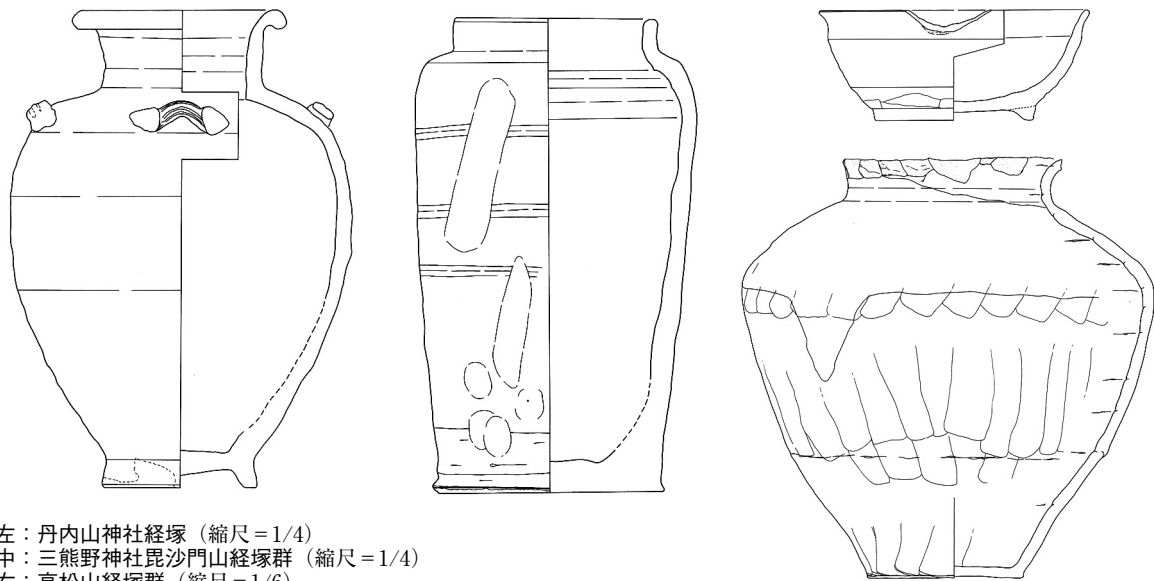
上須々孫館跡



※ 1・3～5 = SX001
2 = SX002
6 = SX005

遺構図 (縮尺=1/120)
出土遺物 (縮尺=1/4)

第6図 出土遺跡の諸例(4)



第7図 経塚出土遺物

ると考えられる。この他、黒岩城跡SD001溝は性格は不明であるが、壁面に接して11世紀末～12世紀初頭の土師器小皿が出土している。なお、花巻城跡（8）VCf大溝と黒岩城跡SD020堀は中～近世の城館に伴う施設であり、11～12世紀代の遺物は周辺からの流れ込みと考えられる。

経塚（塚状遺構）

発掘調査が実施されたものが5遺跡で計13基、出土地点の詳細が不明なものが3遺跡で計8基である。発掘調査された事例として上須々孫館跡SX001・002塚をみていく（第6図）。2基はいずれも方形プランの川原石積み経塚で、SX025土壇状遺構の東西に並んで構築されており、SX001は基底部が一辺約6m、高さ約0.9mで、SX002は基底部が一辺3.5～4.5m、高さ約0.3mである。2基とも塚中央部やや東寄りの位置で主体部となる石室が確認されており、SX001の主体部には須恵器系陶器壺が正位、渥美窯産壺が逆位で埋納されており、墨書礫も出土している。SX002の主体部には渥美窯産壺が逆位で埋納されていた。埋納形態は、SX001・002とも経筒が出土していないことから及川真紀の分類による「⑤陶器壺のみ埋納」または「⑥木製経筒を陶製ないし石製の外容器に埋納するもの」のいずれかと考えられる（及川2004）。なお、陶磁器はいずれも12世紀末の製品である。この他、丹内山神社経塚西経塚でも方形の石室が確認されており、三重にされた蓋石の下から白磁四耳壺（第7図）と蓋に使用されたと

考えられる湖州鏡が出土しており、埋納形態は上須々孫館跡と同じく及川分類の⑤・⑥のいずれかと考えられる。南部工業団地遺跡K地区（28）では周溝を共有する6基の塚状遺構が検出されており、K205塚の周溝堆積土と盛土中から12世紀後半代に属する渥美窯産壺が出土している。

なお、詳細な出土地点は不明であるが、三熊野神社毘沙門山経塚群の北経塚では石櫃と銅製経筒が出土しており、埋納形態は及川分類の「②銅製経筒を石製外容器に納めるもの」であったと考えられる（註5）。一方で、南西経塚では常滑窯産三筋文壺が出土しているが経筒が確認されていないことから及川分類の⑤・⑥いずれかと考えられ、同じ経塚群でも個々に埋納形態が異なっていたと考えられる。また、丹内山神社経塚の東経塚では凝灰岩製の経筒が出土していることから及川分類の「⑦石製経筒のみ埋納するもの」と考えられ、稗貫・和賀地域では経容器の埋納形態が多様であったことがわかる。

その他の遺構

成田岩田堂館跡SX06は長軸が3.7mある不整形なプランの遺構で、人為的に埋め戻されている。廃棄土坑の可能性があり、11世紀代の土師器碗が出土している。

まとめ

ここまで稗貫・和賀地域における11～12世紀の遺跡についてみてきた。最後に時期ごとに内容を列記してまとめとしたい。

まず奥州藤原氏の所領となる以前にあたる11世紀中葉～12世紀初頭についてみていく。11世紀中葉の遺跡は、稗貫地域の宿遺跡と蛇蛭蛆遺跡の2遺跡のみである。両遺跡は北上川に流れ込んでいた旧河道を挟んで隣接した一体となる集落であり、蛇蛭蛆遺跡では竪穴建物が検出されている。11世紀後葉になると遺跡は和賀地域で増加する一方、稗貫地域では花巻城跡で遺物が出土しているのみである。和賀地域では北上川東岸域に遺跡が集中し、和賀川南岸でも確認されるようになる。遺物は土師器が主体で、椀・皿・柱状高台で構成される。遺構は竪穴建物と礎石建物があり、岩崎台地遺跡BXⅢe22住居跡は両地域の古代竪穴建物の中で最も新しいものである。11世紀末～12世紀初頭の遺跡は、現在のところ和賀地域の北上川東岸域でしか確認されていない。遺物は11世紀後葉と同じセットの土師器が主体となる。遺構は掘立柱建物・礎石建物・土坑等がある。

12世紀は奥六郡が奥州藤原氏の所領となった時代であるが、稗貫・和賀地域では12世紀前葉といえる遺跡は少ない。出土遺物や炭化物の年代測定結果からこの時期といえる遺構は高木中館遺跡SK02のみであり、遺跡数は11世紀末より大幅に減少する。この時期に遺跡が減少する理由としては、新たに藤原氏の所領となった際に旧来の集落・寺院の体制が一度解体された為と考えられ、11世紀後葉に大型の礎石建物が建てられた寺院（白山廃寺・国見山廃寺）でも12世紀中葉まで時間的な断絶があることがそれを示しているといえる。しかし、12世紀中～後葉になると隣接する胆江地域や三陸沿岸部と同様に、稗貫・和賀地域でも遺跡数が全期間を通じて最も多くなる（村田2016・2019）。分布域も拡がり、花巻市の旧東和町域や西和賀町の錦秋湖付近でも確認されるようになる。また、和賀地域の北上川東岸域では12世紀初頭までに一旦生活痕跡が無くなった遺跡でも再び遺構・遺物が認められるようになる。この時期の遺物は国産・輸入の陶磁器類が中心であり、もう一つの主要遺物であるかわらけは少ない。胆江地域では総遺跡数の54%でかわらけが出土しているが（村田2019）、稗貫・和賀地域では6遺跡のみであり、11世紀中葉～12世紀初頭の遺物のみ出土した6遺跡を除いても23%と胆江地域の半分にも満たない。また、1遺跡あたりの出土量も少なく、10点以上出土し

ている遺跡は国見山廃寺跡のみである。溝で囲まれた区画内に庇付掘立柱建物を配置する千苺遺跡は遺構配置から居館になる可能性があるが、陶磁器類は多いもののかかわらけの出土は1点のみであり、かわらけを使用した宴会儀礼を行っていたといえる出土量ではない。

遺構としては宗教行為に伴う施設である経塚の多さが特徴といえる。遺跡数は8遺跡と胆江地域と同数であるが、総遺跡数に対する比率は胆江地域の2倍以上である。埋納された陶磁器の年代から経塚はほとんどが12世紀後半代に属すると考えられる。

以上のように、胆江地域（井澤・江刺郡）と比較すると、稗貫・和賀地域（郡）は同じ奥六郡内であっても遺跡の様相が異なることがわかった。特にかかわらけの出土量の少なさは、平泉中心部はもとより胆江地域と比べても宴会儀礼があまり行われていなかった、すなわち儀礼を行い得る階層の人々が少なかったことを示しているといえる。一方で、経塚が多い理由として当地域は10世紀以降国見山廃寺跡をはじめとする寺院や仏教関連遺跡が多く、時間的な断絶はあるものの平泉文化が浸透していく際に宗教関連のものが受容されやすい地域性があった為と考えられる。

注

1. 『吾妻鏡』文治5(1189)年9月23日条には「井澤・和賀・江刺・稗貫・志和・岩手」とあり、現在の花巻市及び北上市周辺が稗貫郡と和賀郡の範囲と考えられる。
2. 遺跡の集成にあたり、羽柴直人氏から特に経塚関連について多くの情報を提供して頂いた。
3. 成田岩田堂館跡の柱状高台は体部が皿形であることから11世紀中葉まで遡る可能性もある。
4. 金属製品のうち鉄製品についてはこの時期の器種ごとの編年が明確でなく、単独で出土した場合に年代特定が困難であることから今回は共伴遺物等で年代推定可能な状況が確認されたもののみを集成した。
5. 三熊野神社毘沙門山経塚群の北経塚ではこの他に陶製経筒（第7図）も出土しており、これについては及川分類の⑥に該当する可能性がある。

参考文献

- 井上雅孝 2010 「平泉かわらけの系譜と成立 ―土器から見た「古代」と「中世」の二重構造―」『兵たちの時代Ⅱ 兵たちの生活文化』高志書院
- 井上雅孝・君島武史・君島麻耶 2011 「北上川東岸に出現する清原期の土器様相 ―11世紀末葉に存在する左回転土器について―」『岩手考古学』第22号 岩手考古学会
- 岩手考古学会 2016 『考古資料にみる「平泉」とその周辺』岩手考古学会第48回研究大会資料
- 岩手県立博物館 2000 『岩手の経塚』第50回企画展図録
- 及川 司 2003 「2 陸奥のかかわらけ(3) 陸奥北部(1) 岩手県」『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院
- 及川真紀 2004 「東北地方の経塚と陶磁器」『貿易陶磁研究No.24』日本貿易陶磁研究会

- 及川真紀 2017b 「岩手県内の平泉関連遺跡」『平泉研究の最前線ー資料学からのアプローチー』科学研究費補助金基盤研究(B)「平泉研究の資料学的再構築」(研究代表者:柳原敏昭)
- 小野寺麻耶 2004 「北上市における古代末期の土器様相 鴻巣Ⅰ遺跡白山堂山頂出土資料の再検討」北上市立埋蔵文化財センター紀要第3号
- 鎌田 勉・八重樫忠郎 1996 「岩手県内の経塚の検証(1) 山屋館跡経塚状遺構と「経塚」といわれる陶磁器について」『紀要』XVI 岩手県埋蔵文化財センター
- 杉本 良 2004 「12世紀の国見山廃寺 八坂神社境内出土の常滑三筋壺から」北上市立埋蔵文化財センター紀要第3号
- 杉本 良 2020 「先平泉文化の諸寺院」『平泉の文化史Ⅰ 平泉を掘る 寺院庭園・柳之御所・平泉遺跡群』吉川弘文館
- 日本考古学協会 2001 『都市・平泉 成立とその構成』日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集
- 羽柴直人 2004 「北上市本郷遺跡、新平遺跡の塚状遺構」『館研究』第3号 岩手の館研究会
- 羽柴直人 2020 「第二の平泉「比爪」」『平泉の文化史Ⅰ 平泉を掘る 寺院庭園・柳之御所・平泉遺跡群』吉川弘文館
- 本堂寿一 1980 「極楽寺伝座主坊跡緊急発掘調査報告ー付、寺院跡出土土器の再整理とその考察ー」『北上市立博物館研究報告』第3号
- 村田 淳 2014 「胆江地域における奥州藤原氏時代の遺跡(上)」『岩手考古学』第25号 岩手考古学会
- 村田 淳 2016 「岩手県沿岸部の様相」『考古資料にみる「平泉」とその周辺』岩手考古学会第48回研究大会資料
- 村田 淳 2019 「胆江地域における奥州藤原氏時代の遺跡(下)」『岩手考古学』第30号 岩手考古学会
- 村田 淳 2021 「花巻城出土の陶磁器類(2)ー花巻城改修以前における出土傾向の分析ー」『花巻市博物館研究紀要』第16号
- 八重樫忠郎 2019 『平泉の考古学』高志書院

遺構・遺物検出遺跡文献

(番号は第1表文献番号に対応)

1. 岩手県教育委員会 1981 「大瀬川B遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅷ(大瀬川A～C遺跡)』岩手県教育委員会文化財調査報告書第57集
2. 岩手県文化振興事業団 2003 『宿遺跡発掘調査報告書』岩文振第440集
3. 岩手県文化振興事業団 2004 「宿・蛇蛭蛆遺跡」『平成16年度発掘調査報告書』岩文振第469集
4. 日本考古学協会 2001 前掲
5. 花巻市教育委員会 1999 『円万寺館遺跡 平成7年度発掘調査報告書』花巻市埋蔵文化財調査報告書第20集
6. 花巻市博物館 2006 『先屋遺跡発掘調査報告書』花巻市博物館調査研究報告書第3集
7. 鎌田勉・八重樫忠郎 1996 前掲
8. 東和町史編纂委員会 1974 『東和町史 上巻』
9. 花巻市教育委員会 1991 『花巻城跡 平成2年度発掘調査報告書』
10. 花巻市教育委員会 1997 『花巻城跡 平成4、5、6年度本丸発掘調査報告書』
11. 花巻市教育委員会 1998 『花巻城跡 平成6年度三之丸発掘調査報告書』
12. 花巻市教育委員会 2001 『平成12年度 花巻市内遺跡発掘調査報告書』
13. 花巻市教育委員会 2011 『平成21年度 花巻市内遺跡発掘調査報告書』
14. 花巻市教育委員会 2017 『平成26・27年度 花巻市内遺跡発掘調査報告書』
15. 岩手県文化振興事業団 1986 『万丁目遺跡発掘調査報告書』岩文振第102集

16. 岩手県文化振興事業団 2020 『万丁目遺跡発掘調査報告書』岩文振第717集
 17. 岩手県文化振興事業団 2006 『高木中館遺跡・下通遺跡発掘調査報告書』岩文振第471集
 18. 東和町教育委員会 1961 『東和町丹内山神社経塚発掘調査報告』
 19. 岩手県文化振興事業団 2021 『成田岩田堂館跡発掘調査報告書』岩文振第732集
 20. 岩手県文化振興事業団 2017 『中村遺跡発掘調査報告書』岩文振第671集
 21. 岩手県文化振興事業団 2016 『千苅遺跡発掘調査報告書』岩文振第652集
 22. 北上市教育委員会 2002 『黒岩城跡』北埋文第53集
 23. 北上市教育委員会 2019 『黒岩城跡(2014年度)』北埋文第135集
 24. 北上市教育委員会 2001 『黒岩宿遺跡』北埋文第47集
 25. 本堂寿一 1980 前掲
 26. 小野寺麻耶 2004 前掲
 27. 北上市教育委員会 2004 『菅田遺跡』北埋文第64集
 28. 北上市教育委員会 1999 『横町遺跡(古代・中世編)』北埋文第38集
 29. 北上市教育委員会 2003 『国見山廃寺跡』北埋文第55集
 30. 北上市教育委員会 2013 『国見山廃寺跡(第32～45次)』北埋文第108集
 31. 杉本 良 2004 前掲
 32. 北上市史編纂委員会 1961 『北上市史』第1巻
 33. 江釣子村教育委員会 1967 『岩手県江釣子村新平塚群遺跡』
 34. 岩手県文化振興事業団 2004 「新平遺跡」『岩手県埋蔵文化財調査略報(平成15年度)』岩文振第455集
 35. 北上市教育委員会 2005 『鳩岡崎三館跡』北埋文第70集
 36. 北上市教育委員会 1995 『南部工業団地内遺跡Ⅱ』北埋文第18集
 37. 岩手県文化振興事業団 1995 『岩崎台地遺跡群発掘調査報告書』岩文振第214集
 38. 北上市教育委員会 2006 『上須々孫館跡』北埋文第79集
 39. 岩手県文化振興事業団 1992 『本郷遺跡発掘調査報告書』岩文振第164集
 40. 岩手県文化振興事業団 1999 『峠山牧場Ⅰ遺跡A地区発掘調査報告書』岩文振第291集
- ※岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書は岩文振と略記
- ※北上市埋蔵文化財調査報告は北埋文と略記

図版出典

- 第1図:筆者作成
- 第2図:岩文振第469集、北埋文第53・55集、本堂1981
- 第3図:岩文振第469集
- 第4図:北埋文第55集、杉本2020、岩文振第471集
- 第5図:岩文振第652集
- 第6図:北埋文第79集
- 第7図:鎌田・八重樫1996

多田等観の花巻における足跡 — 日記、『観音堂記録』、書簡から — (1)

花巻市博物館 学芸調査員 松橋香澄

はじめに

花巻市博物館では、令和3年12月11日から令和4年1月23日の期間、令和3年度共同企画展ぐるっと花巻・再発見!～イーハトーブの先人たち～「多田等観－運命のチベット、そして花巻－」を開催した。

この展示の中で、多田等観が花巻で過ごした日々について来館者の理解をより深めることを目的に、昭和19年(1944)から昭和26年(1951)の等観の日記と『観音堂記録』、博物館で所蔵している等観自筆書簡の一部を一覧にしたものを展示した。

この一覧は、今後の教育普及事業や展示活動などで活用できるため、今号以降何度かに分けて取り上げる。

なお、この一覧は幅広い世代の来館者の閲覧に供することを目的として作成した。そのため、漢字や表記などを現在の言葉で言い換えている部分があるので、ご承知置きいただきたい。

1. 等観の日記と『観音堂記録』について

多田等観(1890～1967)は、秋田県出身の高名なチベット学者である。ダライ・ラマ13世と師弟関係を結び、10年にも及ぶ現地での修行生活の末、チベット仏教に関する様々な資料を日本にもたらした。

等観はこうした資料を戦禍から守るため、実弟が住職をしていた花巻の光徳寺に疎開させる。しかし、光徳寺も空襲の被害に遭う可能性が高かったため、湯口村(現、花巻市湯口)に居住していた光徳寺の檀家の蔵に分散させ資料を守った。これが縁となり、等観は度々花巻を訪れている。

等観が花巻に訪れた際にどのような人物と交流を持ち、どのようにして過ごしていたのかを知る手掛かりが、等観が記した日記と、円万寺観音堂に納められている『観音堂記録』に残されている。

これらについては『花巻市博物館研究紀要』第3号・第5号において寺澤尚氏により詳しく紹介されている。今回の一覧もこれを参考に作成したものであるが、日記の記載と

『観音堂記録』の記載を並べて紹介することで、相互に情報を補完しながら、等観が花巻で過ごした日々を知ることができる。

2. 等観自筆書簡

等観の書簡については、花巻市博物館で所蔵しているものを中心に紹介する。

これは、平成13年(2003)に花巻市膝立の照井テフ氏から花巻市博物館建設推進室に寄贈されたもので、等観と交流の深かった照井忠太郎氏とその息子の昇氏に充てた102通もの書簡である。

『花巻市博物館研究紀要』第2号で寺澤尚氏によって紹介されているものを補完するかたちで、新たに解説した書簡についてもまとめてある。

なお、当館で所蔵している書簡のうち、最も古いものは昭和25年(1950)と推定される。本稿では、昭和19年から昭和22年までを掲載するため、書簡については次回以降の紹介となることをおことわりしておく。

参考文献

- 寺澤尚「チベット学の先駆、多田等観と花巻～博物館に寄贈された多田等観の書簡類を中心に～」『花巻市博物館研究紀要第2号』(花巻市博物館 2006)
- 寺澤尚「資料紹介 多田等観が記した『観音堂記録』について」『花巻市博物館研究紀要第3号』(花巻市博物館 2007)
- 寺澤尚「多田等観と花巻－多田等観の日記を中心に－」『花巻市博物館研究紀要第5号』(花巻市博物館2009)
- 湯口郷土誌編集委員会『湯口郷土誌』(花巻市湯口公民館 1989)

多田等観の花巻における足跡 ― 日記、『観音堂記録』、書簡から ― (1)

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和19年	4月16日	● 午前八時九分花巻に赴く。黒沢尻下車更木を経て徒歩にて光徳寺に行く。	黒沢尻 →現・JR北上駅
	4月17日	● 川勝を訪問。島床を訪問病気見舞。昨日島正出発の由。	川勝 →「川勝魚問屋」のこと。光徳寺の近所だったので交流があった。 島 →当時花巻市上町で島呉服店を営んでいた「島理三」という人物。等観の晩年まで交流があった。
	4月18日	● 花巻を出発、岩谷堂へ赴く。	岩谷堂に向かった後は、水沢・仙台を経由して22日に帰宅している。
	8月17日	● 大須賀大河原より来り。朝食後辞して汽車に乗り岩沼で別れた。予は花巻に赴く。花巻は涼しかった。経蔵建設の件、文庫疎開の件、長元寺の件等の話ある。奥の座敷で休む。	弟義蔵との間で、チベット大蔵経を納める経蔵やチベット請来資料の疎開について話し合ったと考えられる。
	8月18日	● 大毘盧遮那成仏経疏一行著を読む。研究所に速達を發し宿直変更交渉。	
	8月19日	● 一行阿闍梨疏を読む。正午より総代会議。智徳法師より切り込み茶碗貰う。	
	8月21日	● 白米三枴と麻糸と粉石鹸の御土産を頂き花巻を辞去。	
昭和20年	1月10日	● 仙台下車吉川にて餅を振る舞われ、花巻へ向かう。	1月7日上野を出発し、白石・仙台を経由して、10日に花巻に到着している。
	1月11日	● 白雪の東奥の風習なつかし終日炬燵に入る。	
	1月13日	● 床屋へ行く、川勝にて夕食。	
	1月14日	● 花巻発水沢下車	
	4月17日	● 土崎発大曲町にて田口謙蔵訪問。花巻へ赴く。	4月10日の早朝に姉崎を出発し、白石・仙台・秋田を経由して、花巻に来ている。翌日から二日間は岩谷堂・水沢に出かけている。
	4月20日	● 花巻滞在。義蔵法要多忙。	義蔵 →光徳寺住職の鎌倉義蔵。等観の弟。
	4月21日	● 右同、勝太郎の来訪あり。鱒一尾持参あり。	
	4月22日	● 右同、今なお炬燵を用いる。無聊。	
	4月23日	● 花巻より姉崎に至る切符を漸やくにして得、東京方面には日々六枚の配給しかなき由である。賃金十五円五十銭也。義蔵払う。	
	6月15日	● 昨日帰途運輸通信省長崎次官に会見。チベット本輸送便宜附与の件申入る。	長崎次官 →長崎惣之助という当時の鉄道省次官で、後に第3代国鉄総裁になる人。秋田中学校の同期生だったという。
	6月19日	● 姉崎駅にて、長崎次官から電話ありしとて丁寧な荷物引受の件申出ある。	
	6月20日	● 駅長鈴木と千葉管理部長北原と貨物車の交渉進める。	
	6月21日	● 貨車来たと通知ある。荷物三十四箇完成、拉薩版大蔵、デルゲ版論疏、ナルタン版論疏、蔵外竹里版本、仏伝画、絵、ウモレ木机等。宛先花巻光徳寺、正午ころ駅へ牛車二台で運搬。安心した。重荷を下したような気持ちになる。	
	7月8日	● 義蔵よりチベット蔵経を三ヶ所に分散疎開した旨通知ある。	後年、記念講演会で鎌倉義蔵は「馬車に荷物を積み、自分は自転車で先立ちをして、湯口、太田、矢沢などの檀家総代に頼み込んで引き受けてもらった。」と話している。
	7月10日	● 五時発途中浜野にて空襲の為五時間退避し且つ列車動かぬ。	浜野 →内房線で姉ヶ崎駅から千葉方面へ向けて3つ目の駅。
	7月16日	● 花巻に赴く。	
	7月17日	● 花巻滞在。川勝夕食。	
	7月18日	● 花巻出発。	
	7月22日	● 仙山線を経て土崎に赴く。	

● = 日記 ★ = 観音堂記録

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和20年	7月23日	● 秋田管理部輸送課長に会見。チベット大蔵経を土崎より花巻に輸送の件申出。	
	7月25日	● 大蔵発送方を亭坊に依頼し <u>三国伝来釈尊</u> 、文殊菩薩を捧持して花巻に赴く。	<u>三国伝来釈尊</u> →等観がチベットから帰国する際にダライ・ラマ13世の侍従で大臣であったツァロンから寄贈された金剛製の降魔釈迦牟尼世尊像のこと。
	7月26日	● 花巻に滞在。	
	7月27日	● 出発	
	8月15日	● 正午重大放送あり天皇陛下の詔書を玉音にて拝聴す。政府の発表あり大東亜戦争終結を報せられがっかりす。	
	8月16日	● 早朝出発、十一時半上野にて漸やく乗車す。	
	8月17日	● 午後六時ころ花巻着。駅大破。光徳寺幸無類なるも附近消失せるに驚く十日の戦火なりし由。川勝夫人爆弾で死せりと。	
	8月20日	● 笹間藤本正道より電話あり招待されてバスで赴き昼食振舞われた。白清両酒の馳走ある。笹間行は始めてである。四囲田圃田舎らしきの寺。暑さ甚だし。二ツ堰の葬式に行く。この附近の葬式の慣例を知る。	
	8月24日	● 太田村山口の石供養に行く。戸来家に行きラッサ版胸像保管の労を謝す。見真大師の碑供養の読経す。四時帰る。	
	8月29日	● 笹間藤本正道より電話あり招待されてバスで赴き昼食振舞われた。白清両酒の馳走ある。笹間行は始めてである。四囲田圃田舎らしきの寺。	<u>笹間藤本正道</u> →真宗本願寺派、命壽山延妙寺住職
	9月1日	● 太田村森ノ腰市次郎宅法華経義疏開翻式挙行。夜おそく帰る。	
	12月2日	● 八時二十五分仙台発花巻に赴く、義蔵不在、川勝に勝通就学の話をする。泊る。	
昭和21年	12月3日	● 雪降る。辞去して水沢に赴く。	
	4月2日	● 白石発水沢に赴く。高橋吉次郎宅泊まる。	親戚である徳力祐憲が住職を務める、宮城県白石市の高德山専念寺に立ち寄り宿泊し、そこから出発している。
	4月3日	● 高橋平助弟戦死悔に行く。チベット読経。平吉吉次郎と昼食する。花巻に行く。	
	4月4日	● 義蔵上洛不在。島訪問す。	
	4月5日	● 義蔵帰坊	
	4月6日	● 川勝夕食、 <u>安倍</u> 来電。	<u>安倍</u> →等観が東北帝国大学勤務中の仙台時代に交流が始まった「安倍公男」という医者。
	4月7日	● 願入寺知徳同行して歳の神下車、一本杉権左衛門の疎開書蔵外箱中の薬方明の書を閲覧主要のもの持出す。板倉一新築したばかりのーに保管されしを拝して有難し。昼食を振舞われた。	<u>願入寺</u> →奥州市前沢区の浄土真宗本願寺派の寺院。
	4月13日	● 盛岡に行く。興蒙学寮に五十嵐不在。 <u>四戸氏</u> 宅訪問す。願入寺参詣、 <u>黙児君</u> 復員。 <u>菅原氏</u> 保育金ー島地家の話を聞く	<u>四戸氏</u> →願入寺総代の四戸慈文 <u>黙児君</u> →島地大等の長男、島地黙児。島地大等は、明治から大正時代にかけての日本仏教哲学の大家。等観がチベットに入った時には仏典の収集などのアドバイスをし、帰国後も面倒を見ていた。 <u>菅原氏</u> →終戦時まで島地家の経理を担当していた菅原忠道という人物。
	6月15日	● 上京、 <u>木挽町</u> で昨日慶応の次第を義父に語る。東北転居、姉崎引払い賛成か表された。	<u>木挽町</u> →妻菊枝の実家 慶応義塾大学のアジア研究所が閉鎖になり、それに伴って俸給が半額になることが伝えられていた。等観は翻意を促したが、決定事項を覆すことはできなかった。

● = 日記 ★ = 観音堂記録

多田等観の花巻における足跡 ― 日記、『観音堂記録』、書簡から ― (1)

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和21年	6月22日	● 義蔵より阿弥陀堂三間四間の綺麗な堂があり安住の地として住者に交渉中の由。	
	6月29日	● 義蔵速達来る。長元寺、阿弥陀堂両坊ぶて夏安居のこと、御開帳のことである。	長元寺 →現在は廃寺となっているが、奥州市江刺区にあった寺のようである。
	7月14日	● 十時十一分発金ヶ崎下車。円福寺立寄り、一時長元寺入を完了す。三時義蔵帰る。	円福寺 →奥州市江刺区にある寺院
	8月2日	● 九時五十分発釜石線にのる。願入寺女房随行。布団チッキに出す。賃三円。乗車賃百三十円也。晴山駅下車。それから山中一里行く。有戸定勝の宅に着いたとき十二時、昼食の握りを出す。定勝老と共に所謂御堂に参る。阿弥陀三尊立って居られる。御茶を入れて頂く。夕食には花巻からの握飯で済まし明るい電光の下で机をすえつけられ、蚊帳を張り後で有戸老人心配してくれる。	現在の花巻市東和町倉沢に地元民が建てたという無人の阿弥陀堂のこと。
	8月3日	● 此堂では朝食の心配をしなければならぬ。	
	8月4日	● 今日では老人達来らず。終日無作	
	8月5日	● 美男美女来らず	
	8月6日	● 終日無脚。遂ひに堂を戸締して赤部部落の菅野徳重郎宅を訪問し風呂を乞う。	
	8月14日	● 高村光太郎と初対面	
	8月28日	● 山口に行く高村光太郎を訪問。三間に二間の小屋の中に炬を切り畳三畳が居間寝間兼用、流しに井戸まで完備している	
	12月22日	● アサ六時電車で円万寺膝立照井勇五郎法事に行く。忠太郎から観音堂々守の話があった。	照井勇五郎 →デルゲ版チベット大蔵経を保管していた家。 忠太郎 →照井忠太郎。照井勇五郎家の分家。花巻を訪れた多田等観の世話を中心になって献身的に行った人物。 観音堂 →円万寺観音堂 昭和21年は花巻で越年している。11月28日に出発してから、白石・仙台を経由し、12月4日の夜花巻に到着している。その後翌年1月7日まで約1ヶ月を過ごしている。
昭和22年	1月6日	● 宮沢政次郎来る。法華経和訳本 宮沢賢治記念出版一部寄贈	宮沢賢治が生前1000部印刷し、知己の人々に配布するように父政次郎に遺言した『国譯妙法蓮華經』だと思われる。
	2月10日	● 円万寺観音堂入りに就き藤次郎老忠太郎来書大喜悦の旨通信ある	「観音堂々守の話」について、地区民で話合い、皆が大いに賛意を持ったという知らせと思われる。
	3月15日	● 宮沢政次郎来訪あり、忠太郎さん来て明日出向打ち合わせをする。	3月1日から4月22日までの約2ヵ月に及ぶ旅程。花巻には3月9日から4月18日まで滞在している。
	3月16日	● 八時二十分の電車で二ツ堰下車。元村長始め大勢の出迎をうけて観音山に初登山する。駅から三十分程で麓高円万寺に集り正面の急坂の段々から登る。堂は嘉永年間改修のもの去年までここに八坂神社を祭祀する。観音さまに観音堂を返へせという論議から隣に八坂神社拝殿が新築された。然しその神社の建築は古き観音堂とは比較にならぬ程粗末である。参堂してガッカリしたのは御本尊の観音さまがお粗末であることである。雨ざらしになっていたらしい像である。ここでは観音精神が厳として活きているもので、その他尊像としても価値なしと考えられた。膝立照井勇五郎宅に来集者と昼食する。観音出開帳の事、予の住居建立の事など話ある。…この夜勇五郎宅泊。夫人を失うさみしそうな勇五郎一家に一夜の宿を借りる。デルゲ版大蔵経の箱を開けて俱舎の四帙を出す。白魚虫わく	
		★ 多田等観、円万寺観音堂に参拝し世話人数と面会す。	

● = 日記 ★ = 観音堂記録

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和22年	3月17日	● 忠太郎始め両二名観音を出迎に花巻に赴く。十時勇五郎仏間に観音像と幅を荘厳して開帳読経と解説法話する。午後にも同様参拝者計百名ばかり。	
	3月18日	● 彼岸の入、忠太郎宅に立寄観音読経する。中村部落の横やに出開帳。昨日同様法話する。晩酒宴ある。予朝の濁酒のため気持ち悪く早く臥す。	横や →高野橋家の屋号
		★ 全三月十八日より多田等観チベツト請来の千手千眼観音像を湯口村に迎え、照井勇五郎、高野橋徳次郎、畠山藤太郎、神山正雄、佐藤政太、高橋周助、高橋耕夫、畠山権左エ門等の宅に開帳法要を修し、法話を行う。	
	3月19日	● 気分晴朗、忠太郎出迎あり。亭主等と御伴して高屋敷に赴く。昨日通り開帳する。辻家の主人殊に万事に注意して待遇する。夜は家人のため話をする。	高屋敷 →畠山家の屋号
	4月1日	● 忠太郎来る。観音様を背負いて鍋倉に行く、畠山藤太郎氏同行。宿は湯口村収入役高橋周助氏宅である。午後と夜との二席。義蔵と共に泊る。	
	4月2日	● 雨、雨、鍋倉の高橋耕二、傳兵ヱ宅に移る。歳の神に立寄る。熊谷友三親戚の家、立派な建物、仏間も豪華、大等雷夢両氏の手紙が額にかけたのを見るも懐かしかった。	
	4月3日	● はれ大風、吹きとばされそう。傳兵ヱ宅から出て高屋敷に帰り昼食後忠太郎出迎あり。八幡部落の神山方へ出開帳。夕食を頂き風いくらか風ぐ。	
	4月4日	● ニツ堰佐藤政太宅で開帳。材木屋で二階で法話する。御詠歌する。おそく忠太郎と帰る。忠泊る。	
	4月7日	● 入仏式準備のため義蔵来る。	
	4月8日	いよ、入仏式。新しく用意した船輿に尊像を移し申し観音女人講中の手で引かれた。先づ先頭天狗の面とホラ貝を吹いた露払いに始まり、他村の講中、次に円万寺部落の講中、次に輿、これをにない人は円万寺五部落（二ツ堰、中村、八幡、上円膝、下円膝）から選出された十人の白丁、次に神楽座唄が御伴して吹奏す。指揮官は高野橋徳治郎である。畠山藤太郎、照井忠太郎等も随従。其他多勢の御伴で三丁余りの長い行列。講中銘々白い牛冠とおゆごりを着たので遠方から白い長蛇を見ゆる。皆々が南無大慈大悲観世音と口々に誦して。九時過発足十一時に山について観音堂を一巡し観音さまを堂に納める。一同感激吾輩殊に感激の思深し。観音経心経を誦して後、別当焼香参列講中焼香、吾段を下りて挨拶した。涙涙涙。この行事は丁度十二時で終る。雨降るだろうとの予報もうらぎり風もないおだやかな天気で一同喜ぶ。部落へ配給されたお神酒が出る。四時ころ下山、高屋敷へ戻る。此夜下円膝部落の人々参集。大酒もりが始まる、大躍やくが始まる。未曾有の賑わいであるという。義蔵泊る。	
		★ 円万寺観音堂本尊として全尊像入佛式を行う。先ず仮奉安所、畠山藤太郎宅より円万寺権現先導船輿にて各部落観音詣員三百有余、行列して山上に奉迎、法要、供養を行う。茲に永く観音堂に奉安、和賀稗貫紫波三郡観音霊所の第二番の観音本尊として崇敬せらるる処となる。	
	4月10日	● 矢沢小学校に行く。寅狩り熊狩りの話をする。	
	4月12日	● 林橋五ッ昼食餅を持参して太田山口高村光太郎訪問。路迷ひて住民から連れて行って貰う。二時ころ帰宿した。	
	4月14日	● 忠太郎宅で送別の宴催された。	
	4月16日	● 湯口中学校の振り出しに講演する、ジャコー鹿、良寛句	
	4月17日	● 午後出発、昼食の離別祝で酔う。徒歩にて鍋倉を離れる。一時田圃をやめて送ってくれる。老人長男花巻まで送ってくれる。	
	4月18日	● 臨時列車二時二十分花巻発に漸やく切符を求め乗る	
	5月7日	● 観音山の例祭はるかに思いを馳せ合掌	

● = 日記 ★ = 観音堂記録

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和22年	5月12日	★ 観音堂別当、其他世話人集會し、多田等観のために十坪の庵室を新築することに決定し、事業進捗のため左の委員を選定す。(中略) 委員長に畠山藤太郎選挙し工事請負者高野橋三右ヱ門に金三万五千圓にて請負のことに決議す。	庵室建設のための事業進捗委員には、二堰・中村・八幡・上円膝・下円膝の各地区から31人が選ばれた。
	5月14日	● 忠太郎から観音祭につき手紙	
	5月24日	● 慶応行幸の日(授業のある日)なれど億劫になり止めた。義蔵へ慶応待遇で生活出来ない事やいっそ東京での生活を止めて湯口へ退いてしまおうかと思う。姉崎生活費をかせげるかと相談した。馬喰の事、観音山住宅の事なども尋ねた	
	5月30日	● 畠山藤太郎から去る十二日円万寺協議の結果三万五千円で庵室新築にとりかかる。中村の高野橋三右ヱ門請負、五部落三十名に委員を設けることなど通信ある。	
	6月1日	● 義蔵来信。姉崎生活窮乏に対し特に同情して来る。休暇を可成多くとり花巻草庵に来るように、月千円位の収入は保証する、然し大学の勤めを止めぬようにとの事である。	
	7月4日	● 昼過ぎ円万寺高屋敷に赴く。書斎その似直ちに維摩經の写經を続ける	姉崎の生活の困窮や観音堂堂守としての庵室建設など、様々な理由があつて7月3日から10月11日までの長期滞在となっている。
	7月5日	● 観音山に登る。三日に上棟した庵に座した。横屋勇五郎照井藤太郎等々 <u>診療の事を語る</u> 。	「診療の事を語る」 →医者安部公男が等観の依頼で年に数回湯口地区を訪問し、診療を行うようになったこと
	7月6日	● 地藏堂(櫻華山延命寺)を詣す。櫻羽場氏に会う。花巻人形の観音地藏、毘沙門天等を貰う。花巻に行く	地藏堂(櫻華山延命寺) →花巻市中根子字古館にある修験宗の寺院で「根子の地藏さん」と呼ばれ、人々に親しまれていた。湯口地区から花巻に向かう途中で位置し、住職の桜羽場秀三氏とは交流があり円万寺観音堂の行事などの手伝いをしてもらっている。
	7月7日	● 汽車電車賃三倍半の値上がりに驚く。高屋敷に帰る。	
	7月8日	● 一家総動員で田の草取りである。別家を訪問して歓待、お酒をいただく。	
	7月9日	● 光徳寺に行く	
	7月10日	● 経谷芳隆を連れて観音山に来る。山上の風光を誉め、その <u>滝の水</u> を飲んで下山する。花巻へ帰る。	経谷芳隆 →大谷光瑞門下で多田等観の義弟 「滝の水」 →染滝：一燈庵での生活水を賄った滝で、観音堂から数十メートル下がった所にある。
	7月14日	● 写經日常の如くし、百姓田のくさとりで忙しそう。観音山にのぼる。忠太郎宅でほし餅を食う。安部へ手紙出す。二十七日仙台発を希望す。	
	7月15日	● 本日より光徳寺の留守番	
	7月18日	● 高村光太郎氏へもはがき出す。歯がため乾餅をいただく。幼少にありしこの行事を思い出した。	
	7月19日	● 午前十時維摩經所説經の写經円満する。	
	7月22日	● 安部から二十六日仙台発湯口へ来ると言ってきた。二十七日にたのむ葉書出す。	

● = 日記 ★ = 観音堂記録

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和22年	7月23日	● 高屋敷へ帰る。奥田正造氏から聖観音新版画四百枚の小包、その中に御詠歌四首おくられる。愚案一、二、お笑い草に「はるばると参れば願い円万寺仰げ仏の深き誓を」「膝立てて仕え祀ればもろ共に蓮の台に住む心地する」「七難の憂へも除き三毒の心の雲も消え果てにけり」「大慈悲の心を共に仰ぎつつ浮世を変えて浄土とやせん」	奥田正造 →成蹊高等女学校の校長となった教育者。 幼時より観音信仰に篤く、法隆寺の佐伯定胤を師と仰いだという。奥田正造氏から贈られたこの4首の御詠歌は、翌年8月20日畠山勘次郎が世話人となって御詠歌額として寄進し、現在も観音堂外陣正面上部に掲げられている。
	7月24日	● 役場で村長助役収入役に会う。診療の方法に就きて会談する。	
	7月28日	● 早朝、鍋倉の高橋周助氏宅に赴く。安部一行六名と会う。宝閑小学校へ雨を犯して行く。四時まで百七十名診療施薬する。五時ころから観音山に赴く。赤清水を通りて登山。雨モヤの下界を展観して貰う。中村の横屋に夕闇ころ着き夕食、酒の饗応ある。	宝閑小学校 →かつて鍋倉（現、花巻市鍋倉）にあった小学校。昭和43年（1968）、湯口小学校に統合のため閉校となった。 赤清水 →関伽清水
	7月29日	● 湯口小学校で診療を開始する。二百余名みな々々有難さに感激するばかりである。雨の中を一行高屋敷に入る。	
	7月30日	● 上中小学校で診療をする。はやめに閉鎖して円万寺の人々の歓待をうける。思いかけぬ太鼓が出たりして一同おおいに村の人々の如何にもてなそうかとする心持に酔う。	上中小学校 →かつて上根子（現、花巻市上根子）にあった小学校。現在の花巻市立若葉小学校の前身のひとつ。
	7月31日	● 観音経を読み観音さんになって人々を療てくれた一行も遂にこの村を去ることなる。雨の中を犯かして見送りに来る。光徳寺で昼食する。	
	8月	★ 元観音堂、移転。山麓にありし観音堂、自明治初年至昭和二十一年を山上に移転。	
	8月7日	● 雨漸やく止む。山に登る。庵室はまだ完成せず。堂に入り暫らく座し読経。	
	8月13日	● 観音山へ登る。大工十人工事に従事する。天井裏をはる。三畳間が一段高くない事と腰出窓が予の注文通りでない点が残念に思う。然しみな人念に働いている。感謝々々。畠山老と共に帰る。	
	8月16日	● 旧七月一日。昨日山に障子張に行く。半分以上張る。一昨日晩白馬三杵で大工さん達の労を労う。	
	8月22日	● 下の観音堂、山上へ移転せしと聞く。	現在は阿弥陀堂になっている。明治維新時の廃仏毀釈の際に観音堂の本尊を麓に下ろし安置するために建てられたお堂のこと。
	8月23日	● 山では部落総動員で道普請する。	
	8月29日	● 旧十四日十時半観音山に登る。堂の委員多数参集し室内で準備する。新宅庵に入る。今朝畳屋が来たとして既に畳が出来上がる。来庵の諸人に吉村修基の茶を接待する。午後一時ころ義蔵、玄悦初めて来庵。玄悦例の如く飛び回る。神社祈願祭終つて後、三時から読経始まる。続いて御詠歌の奉納あり。参詣の男女の諸人もろともに声を併せて詠進する。それから御話、次に神楽奉納の順序で進む。読経のなかばから雨降る。二ツ堰から来た盆踊衆中が雨にぬれ落ちたのも気の毒である。庵に徳利来りて宴始まる。堂拝殿等諸所では賑わう。庵新築大工連中に対する御苦勞分の謝宴も併せ行われた。下山、玄悦帰花す。高屋敷へ泊る。	芳村修基 →竜谷大学教授 玄悦 →甥 『観音堂記録』によると、一燈庵建設費用として、上田藤・下田藤・二堰・八幡・中村など16地区の529人からの寄付があった。
		★ 庵室落成。高野橋徳次郎、照井忠太郎代表として多田等観に寄贈申出ありたり。同日移転、住居す。	
	8月30日	● 雨を犯かして引越、昨夜来、堂に籠っていた人々に御供餅を馳走するため急いだ。照井忠太郎・畠山勘次郎・長蔵と途中で会う。堂には畠山善兵衛・高野橋徳次郎・仁太郎など居残る。昼ころまで賽銭勘定する。夕ころ覚蔵（畠山）別家若衆夜具、炭、米、など持って登山。台所、座敷にランプ灯す。今夜より山房に寝る。	

● = 日記 ★ = 観音堂記録

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和22年	8月31日	● 八時から上門膝部落人上山あり。堂にて読経講話する。因と果との話、勘次郎に乞わる、俣一勇五郎持参の参拝を散会後いたゞく。照井忠太郎・畠山勘次郎泊る。	
	9月1日	● 十時太田村山口の浅沼富蔵依嘱で石供養に向かう。十一時高村光太郎先生訪問不在途中出会、立話。	
	9月2日	● 勘次郎染滝までの階段を造りに来る。	
	9月3日	● 畠山藤太郎、勘次郎来る。飯豊衆参拝。高屋敷でジャータカ（本生経）虫干しする。カマドの衆（高野橋の分家の人々）参拝。勘次郎夕食持参味噌珍味々々上門膝観音講。	
	9月4日	● 早朝義蔵来る。大蔵会と矢沢講演打合せに来る。似内観音参りく来る。開帳する。門座持参ある。	
	9月5日	● 勘次郎さん薪造りに来る。九時ころ六左エ門と高村光太郎氏、六左エ門孫男同行来訪。続いて佐藤元花中校長来る。堂宇から滝へと順次案内する。馬頭観音の花巻人形型を作ること、姥杉材を彫刻してくれること、姥杉を天然記念として保管名所たらしむることなど話ある。稗貫平野の展望には鑑賞の多くを愛で庵に入りて台所、炉をことに気に入り終日そこに落付かれた。六左エ門、米三折漬物一重清酒四合ビン持参。鉄鉢米をたいて昼食を整える。濁酒一杓、ナス汁三ナベ作り畠山勘次郎の沢庵と、十年味噌がお煮となる。五時帰る。悠々無一物、満喫荒涼美を団扇に残す。新刊高村光太郎詩集寄贈ある。雨になる。三畳雨もりする。	
	9月6日	● 覚蔵と喜代老来て台所俄に賑やかになる。徳松から貰った餅など焼いて餐びする。残物であったが白酒で一層にぎやかになる。光太郎氏の団扇が話の中心となる。勘次郎子供手紙持来る、 <u>明子・千枝子</u> よりはがき	明子・千枝子 →等観の三女と次女
	9月7日	● 早起会の小学児童、十六七名来る。話して聞かせる。 ★ 座机一、庵室用姥杉にて作る。照井已喜奉仕	
	9月8日	● 鍋倉北村徳助方御座に招かれる。午後と夜と二席、因果と賢愚経の話。観音の慈悲の話をする。夜は周助宅で泊る。	
	9月9日	● 宝閑小学校で子供に話する。虎がり熊がりの話。	
	9月11日	● 大蔵会一時、佐野とつとめる。賢愚経の話をする。晩平良木（現・花巻市矢沢）熊友氏宅へ赴き老青年観音思想を語る。来集二十名ばかり。	
	9月12日	● 観音経の話をする。正午帰花。大蔵会に会う。再び雨を犯かして帰矢する。当日佐野同行、夜は因と果の話をする。	
	9月13日	● 徳力祐憲電の如くに来らす。代参として高甚、哲公来る。同行して観音山に登り自炊生活を体験せしめる。ブドー酒三本梨一カゴ持参。忠太郎夜具持参する。	徳力祐憲 →白石専念寺住職
	9月14日	● 照井忠太郎と別当から野菜漬物持参あり。正午にぎりを持って白石へ帰る。矢沢行で疲れを覚えた。	
	9月15日	● 昨夜打ち続く豪雨を犯かして上根子農会裏神山葬式へ行く。佐野来宅しあり。式法事後にモヤタ法事に行く。引出茶碗を買い道路川になりしを漕ぎ分けて高屋敷（畠山家）へ泊る。	
	9月16日	● 漸やくはれ晴天を見る。暑さも加わる。沢田悔み読経行登山。出窓に雨水入り少々被害を受ける。北上黒沢両川のハンランで花巻方面大騒らしい。太田方面行橋はみな落ちたという。神山から葬式引物届けられた。四時ころ約束通り下門膝の観音参りに来る。白酒四本持参重箱いろいろ、十人程でこじんまり。大いに飲びおどる。照井忠太郎遅れて来り泊る。覚蔵へ光太郎詩集を貸す。一同に白石梨を振る舞う。	関東地方から東北地方にかけて大雨の被害をもたらしたキャサリン台風についての記載。
	9月17日	● 午後平良木熊谷友三参詣。御供西瓜持参供える。三時ころ帰る。花巻洪水の話あり。畠山友治ランプ火屋ニッ持参し登山す。	
	9月18日	● 櫻羽場老登山。青豆を持参あり。照井忠太郎・畠山勘次郎、両公も来り。酒盛り始まる。	
	9月19日	● 観音道路を一路、花巻へ赴く。葬式のためである。似内（現・花巻市似内）へ葬式に行く。洪水の跡を通る。五時過帰山。	
	9月20日	● 高屋敷和讃講で因果の話をする。夕食の餐慶ある。泊る。	

● = 日記 ★ = 観音堂記録

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和22年	9月21日	早起会。下円膝の子供弁当持参。友治主催する境内を掃除する。 ● 虎がり熊がりの話をする。昼過ころ義蔵来る。餅持参。横屋、六郎、勘次郎など来る。彼岸の中日にて諸所より餅の供養を受ける。	
	9月22日	● 姉崎へ干うどんするめ小包にする。珍しく勘次郎来らす。当方閑である。寒風身に沁みる。	
	9月23日	● 森（現・花巻市森木）本館権太郎法事に行く。庵を出て中島橋をわたり昌勸寺前を通り館の円徳寺横丁から同家に入る。凡そ二時間の行路、帰りは土瓶引物を土産に貰う。高屋敷から朝夕寒さに気付いて掛け布団持って来てくれる。鍋倉祭賑わしい。	昌勸寺 →法音山昌勸寺、花巻市太田にある曹洞宗の寺院 円徳寺 →石龍山圓徳寺、花巻市森木にある真宗大谷派の寺院
	9月24日	● 中日なれば高屋敷へ下り餅の馳走を受く。帰りてから金松から餅(ジダ・ゴマ)と漬物届く。今一日餅である。	
	9月25日	● 義蔵来庵、三蔵宅御取越へ行く。夜に高屋敷へ洗濯をたのむ。	
	9月26日	● 黒沢尻相沢傳吉葬式に導師する。妙桃庵で式を行う。帰り花巻立寄泊る。	妙桃庵 →常盤山妙桃寺、北上市常盤台にある曹洞宗の寺院
	9月27日	● 宮沢政次郎氏と同行観音山に至る。宮政氏から賢治碑の拓本をいただく。晩陰まで語り去る。	
	9月28日	● 十月十日光徳寺手伝いをするに意を決し辻直四郎と松本へ疎開の間洪水に会ったため帰学遅れる旨手紙を出す。畠山勘次郎宅朝めしを食う。早起の子供等に話をする。光太郎老人を訪問する。餅、納豆、林ゴウリ等持参する。三時まで語る。馬頭観音を彫って献納すること。七十まで健康体を作りそれから名作境に入ると。獅子踊、神楽みたと。予は今日までの河口関係の忍耐生活なりしを告げ同情を聞く。古来名人名作者の境界は庵に僅かな煙を立てた生活であっただろうとて自己の生活を喜ぶ。	辻直四郎 →東京大学印度哲学科教授
	9月30日	● 円万寺部落有志に上根子方面二人参加して月見の宴を張る。台所に大鍋を持ちこみ野菜鍋を作る。濁酒凡そ七杓持こむ。諸人重箱持参。五時過落暮から騒ぎ始まり愈々宴を開いたのは七時ころ。御膳も出来たり。宴会らしい気分となる。酔まわころ月雲間から額を出し花巻駅頭の電気の輝きもはっきりしてきた。散会したのは十時過ぎ。	
	10月2日	● デルゲ版大蔵経法華を見たしと思ひ照井忠太郎宅へ行ったが在らざりき。夜鍋倉野中の青年及川喜代志米五合持って来り。十時過まで話して去る。	
	10月4日	● 町内不幸の家へ行く。泊る。	
	10月5日	● 畠山家へチベット阿弥陀仏国曼荼羅ツォンカバマンダラを持来り寄託した。カマドで開帳し中食をいただく。送別之意を加えて御酒豊富なり。帰山する。	
	10月7日	● 太田山口の御取越に共に行く。花巻に泊る。	
	10月8日	● 義雄坊祥月命日、朝御斎を頂く。忠太郎宅でドジョウ汁の送別会に招かれ一家と共に歓談する。忠太郎山で泊る。	
	10月9日	● 佐藤別当宅に晦に行く。忠太郎夜具を高屋敷に運ぶ。午後畠山藤太郎、照井忠太郎、畠山勘次郎来山。一庵の萬物を下界に運び去る。此夜観音とともに畠山家に泊る。かまどの親爺も来て送別宴ある。	
	10月10日	● 畠山家と別れをおしみて雨中覚蔵氏と共に花巻に向う。英霊分配のため山の人混み十時松山寺に向う。同寺に湯本村民葬ある。後岩淵家に忌明け法事。	
	10月11日	● 早朝佐野と一本杉を経て昌観寺の太田村民葬に参列する。後森腰の小原仁助方の葬式法事に行く。雨にくれつつ花巻に帰る。三千五百円今夏中謝礼布施他千六百円光徳寺より。	
	10月12日	● 三時の古河行列車に登る。	
	12月8日	● 正午、尻内行で花巻に向かう。	
	12月9日	● 権左衛門の法事に行く。此夜畠山家に泊る。	
	12月10日	● 遺骨分配式。釜場の森家へ行く。	
	12月11日	● 似内の英霊葬法事に行く。	

● = 日記 ★ = 観音堂記録

多田等觀の花巻における足跡 ― 日記、『観音堂記録』、書簡から ― (1)

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和22年	12月12日	● 大雪をかきわけて、昌観寺太田村民葬に行く。森の腰の農家で葬式忌明けの法事。	
	12月15日	● 荒田善右エ門の年忌法事に行く、大法事である。	
	12月16日	● 報恩講	
	12月17日	● 泉山氏来援ある。	
	12月18日	● 報恩講講座、釜場の葬式ある。	
	12月19日	● 川端の法事に行く。(子供)	
	12月20日	● 横川目の法事、雪路を藤次郎を供にして行く。	
	12月22日	● 高屋敷に赴き観音山に登る。山には横切りや林切りの人々ある。小原仏師御宮殿を造営するために宿りおる。庵室は不在中幾多の宴会で煤けて仕舞う。勘次郎藤太郎庵室に居る。大に不平をのべる。この夜高屋敷に泊る。	小原仏師は観音堂内の、多田等觀が納めた千手千眼十一面観音像を祀る内陣厨子を製作した。
	12月23日	● 寒さ花巻にまして感じか強い終日たき火に親しむ。	
	12月24日	● 晴山組御取越のため花巻に戻る。	
	12月25日	● 似内小田島本家の法事。	
	12月26日	● 釜場文庫のために出向する。	
	12月29日	● 大雪の中を安部医者来訪ある。高屋敷に入る。一同驚く。風呂をたてて歓待。	
	12月30日	● 安部逗留、予は寅さんの法事に行く。安部帰る。	
	12月31日	● 茶屋から友治さんと共に登山する。及川女史年越の馳走を整えて山上に在る。忠太郎勘次郎友治勇市など年越の宴を張る。	及川女史 →及川アサヨ、中学校教員

● = 日記 ★ = 観音堂記録



図 展覧会ポスター



写真 一覧の展示風景

「桜の地蔵さん」について

布 臺 一 郎

はじめに

2019（令和元）年の秋、市職員の大先輩である伊藤新一氏から『花南の歴史かわら版収録』という冊子のコピーをいただいた。「桜の地蔵さん」由来という項の部分であった。後述する花巻史談の記事でこの地蔵尊のことを知っており、この道を通る時にはいつも敬意を払っていた。そんなこともあって、2020（令和2）年の秋に伊藤新一氏より花南地区コミュニティー会議で花南地区の歴史を話してほしいという依頼を受けた際、桜の地蔵さんに焦点を当てて、話を組み立てることを思いついた。本報告はそのときの調査に基づくものである。

1 「桜の地蔵さん」由来について

先に触れた『花南の歴史かわら版収録』にある「桜の地蔵さん」由来には次のようである。「桜町四丁目の旧奥州街道筋（現上町・成田線の道路沿い）に「地蔵尊」が建立されている。さて、この地蔵尊は大正12（ママ。地蔵尊に刻まれた建立年は大正11（1922）年とあり、この年が正しい。）年に三川まつゑ氏ほか向小路同心子孫が中心になって建立したもの。（略）文中の三川氏とは元根子村長、三川平次郎氏妻まつゑ氏のこと。」とあり、更に、郷土史家の故熊谷章一氏の『一鳴驚人』から引用した解説として、地蔵尊の建立場所付近が明治以前は殺生場とよばれて重罪人を斬罪に処した場所であったことが書かれている。この地蔵尊の付近がそういう場所であったならば、慰霊のために仏像を建立するのは自然な流れだと思う。しかし、私が不思議に思ったのは「桜の地蔵さん」由来の続きの部分で、先の『一鳴驚人』の引用であった。「藩政時代の末期、南部藩士花巻城御取次役であった佐藤昌蔵は将来を見通して花巻の若者訓育に心をかたむけていた。その最も信頼し、鍾愛を嘱望していたのは松川・柏葉・平沢・中村・宮野・簡・小田島の俊才青年たちであった。ところが7人が豊沢川河畔の水車跡近く（豊沢橋下流右岸）で火薬の実験中に爆発し、うち4名が落命するという大事件

が起こった。これを目撃した前記の三川氏はいたく悲しみ、その弔いの地蔵尊の建立をいつの頃よりか発願したと思われる。この若者の死去50年余を経て大正の末年に、当の三川氏の主唱で宗青寺において盛大に「供養追悼会」が催されている。（花巻市史第3巻参照）。については地蔵尊の建立と供養追悼会は期を同じくする。」

前途有望な若者の死を悼んで供養追悼会を開くのも自然な感情として理解できる。しかし、処刑された者たちの供養と若者の供養を並列するとその関連性が何なのだろうか。この二つを並列すると供養の意図がぼんやりとするのではないかと感じた。しかし、熊谷章一氏がこの二つのことを並列して書いたのには何か隠されたものがあるのではないだろうか。

2 「桜の地蔵さん」の建立場所について

考察を進める前に、まず「桜の地蔵さん」の建立場所の不動産情報を示そう。この場所は住所表記では花巻市桜町4丁目72-3となっており、土地の地番としては、花巻市桜町4丁目72番3と表示されている。この土地の登記簿によればこの土地に関する最も古い記録は明治42（1909）年7月26日の保存登記であり、所有者は根子村大字下根子第2地割字向小路34番地豊川仁兵衛であったことがわかる。この土地は次に大正6（1917）年12月7日に売買され、翌12月8日付けで、根子村大字下根子第2地割字向小路36番地菊池昌太郎の所有となった。更にこの土地は昭和6（1931）年12月27日に家督相続がなされ、昭和13（1938）年5月24日付けで菊池實の所有となった。なお、「桜の地蔵さん」が建立されたのは大正11（1922）年であるので、建立当時の土地所有者は菊池昌太郎ということになる。

ところで、上述のこの土地の所有者たちはどのような人々なのだろうか。

3 花巻向御組御同心の人々について

「桜の地蔵さん」の傍にはかつて同心屋敷

が立ち並んでいた。花巻物語辞典は次のように解説している。「天正19年（1591）九戸の乱のとき鳥谷崎城の守備にあたった一族の浅野重吉は、配下の一隊30人を残して引き上げ、花巻同心組となり、城内二の丸馬場口御門の下馬場（現鳥谷崎神社南下辺）に住居を与えられて住んだ。延宝8年（1680）御同心30人は、向小路（桜町）の延長100間の東側に15軒、西側に15軒に移り住み、これが現在保存している同心屋敷である。今の所在地は保存のため昭和55年3月に2軒を移築したものである。」

この同心屋敷については、その居住者の変遷が『花巻市文化財調査報告書第1集』に収められている『花巻向御組御同心屋敷の集落地理学的考察』の中に、明治から昭和まで調査され、同心屋敷所有者変遷一覧の表にまとめられている。その表によると上述の豊川仁兵衛は同心屋敷のあった通りの東側北から9番目に居住しており、菊池昌太郎はその2軒南に居住していたことがわかる。また、「桜の地蔵さん」の建立に尽力した三川まつゑの夫である三川平次郎の名前は同心屋敷の通りの西側北から9番目に見える。これらのことから、「桜の地蔵さん」が建立されている土地については当時同心屋敷に居住していた人々が関与していたことがわかる。それではその土地に建立された地蔵尊はどのようなものであろうか。

4 殺生場とお地蔵さまについて

『花巻史談第10号』に『殺生場とお地蔵様』という記事がある。「この向小路の南はずれに殺生場（刑殺場）が設けられた。重罪人を死刑にしたところである。（略）このお地蔵様の台石には次のように刻まれている。願以此功德 普及於一切 我等與衆生 皆共成仏道 大橋ノブ 三川マツエ 木村タミ 大橋ウメ 菊池昌太郎 大橋珍太郎 豊川仁兵衛 大正11年陰暦7月16日建立」ここに記されている名前のうち、三川マツエ、菊池昌太郎、豊川仁兵衛は同心屋敷の住人として確認しているが、他の方はどうだろうか。改めて同心屋敷所有者変遷一覧の表を見ると、大橋珍太郎の名前は東側北から14番目に確認でき、同じく東側北から2番目と3番目に大橋姓が載っている。大橋ノブと大橋ウメは恐らくこの家族ではないかと推測する。更に西側北から15番目には木村姓が載っており、木村

タミはこの家族ではないかと推測する。1「桜の地蔵さん」の由来についてで「三川まつゑ氏ほか向小路同心子孫が中心になって建立」と引用したが、土地にしてもお地蔵さんにしても残っている記録からは同心屋敷居住者のみの関与しか見いだせない。三川まつゑ氏が火薬の爆発事故を目撃したのが明治元年（1868）、豊川仁兵衛が土地の取得をしたのが明治42年（1909）、同心屋敷の居住者たちが地蔵尊を建立したのが大正11年（1922）であるが、なぜ彼らは長期にわたって、しかも組織的にお地蔵さんの建立に専心したのだろうか。ここでお地蔵さんの建立場所から三川氏が催した供養追悼会のもととなった爆発事故について視点を変えて調べてみる。

5 扇堀橋について

花巻市史第3巻に火薬爆発事故で落命した松川直治について次のように書かれている。「直治茂承は、滋安（注：松川滋安）の二男として弘化3年（1846）5月3日に生まれた。若年ながら文武の達人で快男子であり、花巻侍を糾合して、秋田戦争への参加を企て向小路（扇堀橋際）にあった水車で火薬を製造中、それが爆発して同氏の人たち数人と共に死した。明治元年（1868）6月19日のことで、直治23才のときであった。」先に「7人が豊沢川河畔の水車跡近く（豊沢橋下流右岸）火薬の実験中に爆発し、うち4名が落命するという大事件が起こった」と引用した場所が扇堀橋際であったことがわかる。それではこの扇堀橋とはどこにあったのだろうか。現在、扇堀という地名は巷では聞かない地名であるが、豊沢橋下流右岸という手がかりをもとに、花巻市建設部道路課で整備している花巻市道路台帳を調べてみると、桜町1丁目地内に扇堀川という小河川があり、これに架かる橋が扇堀橋であることが分かった。現在、その橋の代わりに、ボックスカルバートが設置されていて、その中を扇堀川が流れている。扇堀橋の由来を更に調べてみると、江戸時代に和賀、稗貫郡の様子を描写した『二郡見聞私記』によってその場所は、「豊澤橋の向ひ扇子（ママ）堀橋の下も当時甚助川原と言、その頃此所は殺生場にて右助九郎火焙と成しとぞ。」とあり、享保年間（1716年から1736年）晩年に里川口助九郎が引き起こした放火事件の責めにより処刑された場所であったことが書かれている。（なお、この火災は花巻城の

南御蔵の一部を焼失させた火事と考えられるが、本レポートでは詳細を省略する。)つまり、江戸時代の少なくとも享保年間までは、同心屋敷のあった向小路の北側の扇堀橋付近に処刑場があり、その場所で幕末の火薬爆発事故が起こり、時期は不明であるが、向小路の南側に処刑場が移り、今その場所の付近に「桜の地蔵さん」が建っているという時間軸がわかった。

6 重罪人とは誰か

本レポートでは、これまで何度か「桜の地蔵さん」付近で重罪人の処刑がなされたということを引用した。封建時代の農民一揆を研究している金野昭人(2020)によれば、「花巻城下向小路に、藩政時代の重罪人処刑場である「向小路殺生場」(むかいこうじ さっしょうば)があった。(略)稗貫・和賀の百姓一揆を調べると、ここで多数の一揆指導が打首・獄門に処せられていたことが記録されている。このことも、住民の間では単に重罪人処刑場として知られているだけで、百姓一揆指導者の多くが処刑された場所としては、意識されていない。」というように、「桜の地蔵さん」付近にあった処刑場についての一般の人の理解が不足している現状が書かれており、筆者も同様に感じている。本レポートでは農民一揆について踏み込むことはできないが、時の支配者に対して、平和的示威行動を起こした民衆を暴力で鎮圧し、首謀者とみなされた者を処刑するという残酷な仕打ちが盛岡藩内はもちろんのこと、花巻地方でも何度も引き起こされていることは一般人の共通認識であると思う。この認識をもって冒頭の「桜の地蔵さん」の由来に戻ろう。

7 「桜の地蔵さん」と「供養追悼会」について

同心屋敷に居住していた武士階級の者にとって、住んでいる向小路の北に位置する、かつて処刑場として使われていた扇堀橋付近で明治元年に前途有望な若侍たちが爆発事故で命を失ってしまったことは大きな嘆きであり、また、大きな恐怖でもあっただろうと推察できないだろうか。そして、その爆発事故の前に農民一揆を理由に無辜の住民が向小路の南側で命を落とさなければならなかったことも大きな悔恨と、また、大きな恐怖ではなかっただろうか。若侍の事故での落命を、それまで処刑によって落命を余儀なくされた

人々への鎮魂によって同時に慰霊しようとしたのが、「桜の地蔵さん」と「供養追悼会」につながったのではないかと推測するものである。このことは「桜の地蔵さん」の台石に彫られている次の言葉からも想像できると思う。すなわち、「願以此功德 普及於一切 我等與衆生 皆共成仏道」である。調べてみるとこの漢文は普回向文と呼ばれているもので、「願わくは此の功德を以(も)って、普(あまね)く一切に及ぼし、我等と衆生(しゅじょう)と、皆共(みなとも)に仏道を成(じょう)ぜんことを」というような意味で、皆が一緒に悟りを得られますようにと願うのです。」この回向文からは「桜の地蔵さん」の建立によって、死者も生者も遍く仏道を成就して、平安に導かれることを重ねて訴えていることを強く感じ、この願いこそが「桜の地蔵さん」の存在なのだろう。

むすびにかえて

「桜の地蔵さん」が1922(大正11)年に建立されてちょうど100年が経過する2022年。残念ながら現在進行しているウクライナ侵略を引き合いにするまでもなく、いつの時代も暴力で民衆を支配しようとする企ては無くならない。「桜の地蔵さん」が象徴するようにこの地域でも同様の悲劇は繰り返されてきた。このような身近な歴史を学ぶことができ、少しでもよき未来を築けるよう微力を尽くせることを強く期待するものである。ところで「桜の地蔵さん」の建立後、羅須地人協会が下根子桜に大正15(1926)年8月23日、(旧暦7月16日、盆の中日)創立された。この日はまさに「桜の地蔵さん」の建立日と一致する。宮澤賢治が羅須地人協会に通うときにこのお地蔵さんを何度見たことだろう。どんな祈りをしたのだろうか。想像は尽きない。

引用文献

花南教育振興協議会、花南の歴史かわら版収録、花南教育振興協議会、2001年、p130,131
金野昭人、学習・調査・論考南部藩 稗貫・和賀の百姓一揆、金野昭人、2020年、p10
南部叢書刊行会、南部叢書第9冊二郡見聞私記、歴史図書社、1971年、p242
花巻市教育委員会、花巻市史第3巻、図書刊行会、1981年、p155
花巻市建設部道路課、花巻市道路台帳、花巻市、2021年、21-40-4
花巻史談会、花巻史談第10号、花巻市中央公民館、1985年、p52,53
原子郎、宮澤賢治語彙辞典、東京書籍(株)、1989年、p726

「桜の地藏さん」について

山影長英、花巻市文化財調査報告書第1集 花巻御組御同心屋敷の集落地理学的考察、花巻市教育委員会、2007年、p13,14

同心屋敷、

https://hana-isan.com/Search/single_page/1/341、2022年2月27日アクセス

花巻城二の丸と南御蔵について

<https://www.city.hanamaki.iwate.jp/bunkasports/bunka/bunkazai/1002078.html>、2022年2月27日アクセス

普回向文、

<https://www.tendai.or.jp/houwashuu/kiji.php?nid=34>、2022年2月27日アクセス

斎藤宗次郎の日記と自叙伝に関する考察 — 大正元年(1912) 8月19日の記事を例として —

花巻市博物館 学芸員 小田島 智 恵

はじめに

花巻の先人のひとりである斎藤宗次郎(1877-1968)は、明治・大正・昭和という3つの時代を生きた北笹間(現・花巻市笹間)出身のキリスト教徒である。

宗次郎は、明治10年(1877)2月20日に北笹間の曹洞宗寺院溪雲山東光寺の住職であった父轟木東林と飯豊(現・北上市飯豊)の豪農斎藤家(屋号藤巻)出身の母さだとの間に生まれた。のちに、「轟木」姓から「斎藤」姓へと変わるのは、稗貫高等小学校在学中に実母の甥にあたる人物の養子となったためである。岩手県尋常師範学校在学中、近代キリスト教思想家である内村鑑三(1861-1930)の著作『地理学考』と出会ったことで内村の著作を愛読するようになった宗次郎は、次第にその思想に傾倒していった。そして、里川口尋常小学校で訓導として奉職中の明治33年(1900)、遂に内村と同じキリスト教徒となり、以後その生涯をキリスト教信仰に捧げていくこととなる。

平成29年(2017)から令和元年(2019)にかけて、約730点にもわたる斎藤宗次郎資料が、宗次郎の孫娘の夫にあたる児玉実英氏をはじめとしたご家族の方より花巻市へ寄贈された。これは、宗次郎が約70年にわたって書き続けてきた日記類や太平洋戦争末期に集団疎開した孫娘とやり取りした往復書簡などを含む貴重な資料群である。

当館では、寄贈された資料について調査研究に取り組むべく日記資料の解読を進めているところであり、本稿では、宗次郎が記した日記と、日記の内容を基にして晩年に執筆された「二荊自叙伝」について一記事の比較考察を行う。

1. 日記

宗次郎の日記は、宗次郎が里川口尋常小学校の訓導として勤務を始めた明治31年(1898)4月から亡くなる直前の昭和42年(1967)までの約70年に及ぶ長大な記録である。それらは、一部を除いてそのほとんどが製本されている。

宗次郎の日記は、書かれ始めた当初は「^{さん}餐^{わがいえ}霞録」と名付けられていたが、のちに「吾家の歴史」と改められた。そして、大正4年(1915)以降のものは、「^{ずいじゅん}随順日記」(執筆時期によっては「随順記」というタイトルで書き記されていく。「随順はおとなしく神のみ心に従ってさからわぬことを意味している」⁽¹⁾という。また、毎日の出来事を記した日記以外にも「^{らいおう}来往日記」(執筆時期によっては「往来日記」という表題で、自宅に訪問した人物の名前や手紙をやり取りした人物の名前などを記録した備忘録も残されている。

宗次郎の日記は、現在当館に所蔵されているものだけで102点(内、2点は長女愛子を書いたもの)になる(表1)。これらの日記は、日々の出来事だけではなく、自らの信仰についての所感や交流のあった人物のこと、時事問題、当時の新聞の切り抜き、人物や世間に対する批評、電報の記録、伝道旅行記など多岐に渡る内容が克明に記録されている。さらには、「傾倒し熱中する内村について、この日記の中に、その口をついて出る信仰の教えや教訓はもとより、警句、怒り、慨き、ユーモアからその溜め息までも、一つももらさじと必死に記録した。ことに内村の臨終の床に侍しては、その口からもれる言葉はもちろん、最後の数十分間には、呼吸数までも数分ごとに数えて書きとめている」⁽²⁾ことから、宗次郎の記録魔ぶりが窺い知れる。その凄まじいまでの記録癖は、「まことに生きた^{レコーディング・マシン}記録機械を思わせるほど」⁽³⁾であった。

宗次郎は、日記を書くことの意義について「日誌は有益のことなり、思想の記述は一種の創造なり、天然の事物を記載するは聖業の観察なり、人生の記録は正勝邪敗の歴史なり、凡て有りのまますを綴る所に大なる価値あり」(読点筆者、以下同)⁽⁴⁾、「予の如く記憶力無き者はこの様にして過去を明かにして行くことは必要と思われる、勿論これは子孫後年の為ではない、予自身の必要上から為すことである、神の愛が如何に多く地上に降れるものであるかを出来る丈深く探らん為である、それ故屢々之を取出して閲覧しなければなら

ぬ」⁽⁵⁾などと記している。家族や親しい人に自身の日記を読ませることもあったようである。

2. 二荊^{にけい}自叙伝

「二荊自叙伝」（以下、「自叙伝」）は、晩年、日記を基にして執筆した自叙伝である（表2）。原本は、NPO法人今井館教友会（東京都文京区）が所蔵している。

昭和34年（1959）、宗次郎が82歳（数えて83歳）の時に起稿し、亡くなる直前まで書き続けられた。「その生誕より1938年（昭和13年）12月25日（この日の記述を終わってペンが彼の手から落ちた）までに及ぶ61年間の記録でB4判20×20の原稿用紙20,941頁、500頁クロス表紙に製本して40冊、しかもなお30年分を残す未完の膨大な記録」⁽⁶⁾である。タイトルにある「二荊」とは、キリスト教徒として生きていくことを決意した宗次郎が明治33年（1900）12月18日午後12時、自らに付けた号である。「喜」と「苦」2つのKを表し、「イエスの荊の冠を再びす＝十字架を負う生涯」⁽⁷⁾を表している。

膨大な量の日記を書き続け、さらに自叙伝まで執筆した宗次郎だが、その理由について「自叙伝」の序文で「斎藤宗次郎 彼の生涯は一見、眇たる存在である。随って未だ存命中であるのに、其自叙伝を綴る如きは無謀無益の企てのように思われる。然し具さに多年の足跡を辿って見れば、人の意表を越えた幾多の事実の横わり居ることを発見する。然も霊的大任を果たされた内村鑑三先生との間に不思議な関係が起り、それが終りまで順調に継続した点に括目する時には、^{けりよう}仮令無知無能なる一田舎漢たるを免れぬとしても、決して軽視放棄し去るべき存在ではないことに気付くのである。そこで自分の事は自分が比較的其真相を知るとい^{もとづ}うに基き、私心を去り聖霊の導き給うまま^か仮りに第三者の地位に立って記述することに決した」⁽⁸⁾と記しており、執筆の動機は偉大なる師、内村鑑三との関係性にあるとしている。「第三者の地位に立って」としているとおおり、宗次郎は執筆初期には自身のことを三人称である「彼」と表記している。しかし、結局明治40年（1907）頃からは、日記と同じく一人称である「予」が使用されるようになっていく。⁽⁹⁾

「自叙伝」は、日記には残されていない宗次郎誕生前の祖先の事績や、宗次郎の誕生か

ら岩手師範学校在学中までの出来事も記されている。これらの部分についても、詳細に記されていることから、記憶だけを頼りにしたとは考えにくく、日記以外の何らかの記録を参考にして書かれたのではないと思われる。また、明治31年（1898）4月以降は、基本的には日記の内容を踏襲しているものの、文章を加筆したり、逆に削除したり、言い回しが変わっていたりといった部分も多く見受けられる。

3. 日記と「自叙伝」の内容比較

「自叙伝」は主に日記を参考にして執筆されたため、基本的にはその内容を踏襲しているものの、文章の加筆や削除がされている部分も多く見受けられることは前項で述べたとおりである。この項では、大正元年（1912）8月19日を取り上げて、日記と自叙伝で内容がどのように異なるのか、その一例を紹介したい。

○吾家の歴史 [大正元年 8月19日]

（／は改行を示す。■は解読不明字を示す。）

八月十九日／午前二時四十分 水を少量飲む、／三時 二百二十八（ほろぶる此の世）を歌ひ／聞かす／パイナップルの汁を飲む、／三時十五分／世のたのしみ（二百九十二）を歌ふ 妻も明かに／声を立て、四番まで歌ひ了れり、／三時十八分／孝詮さんに言ってやって下さったでせうな、／三時二十五分／パイナップルの汁を用ふ／オバアサンにも■■■■にもあげよ 夜遅くまで世話して下さって／腹がすきたでせう／三時三十五分／水薬を土瓶にて飲む、／三時四十分／水二匙を呑み水は旨いといふ／四時／多祈子を床より起して病母を呼ばしむ、母は「ウウ」と明／かに答ふ 見ゆるやと問へば／見えるて見えるて／四時五分／口を漱ぐ／四時半／小田代老姉帰る、／五時／みよ子来る、／六時／■■■■帰る、／六時十分／朝食（ミヨ子供）／六時五十分／牛乳／八時頃まで／昏睡状態、／時々言を発す／「おつやさん」と高いいふ／「吹張にきれを……」／八時三十分／平野氏来る、脈を見胸を見足を見る、／本人へハ大事なし次第によくなるといふ／予密かに問へば／今日の容態は頗る異なる、／今日明日は大切です お勞りなさい／薬を飲みしを忘れまた求む、／時々空

を掴まんとす、／九時半／予に配達に行つて来て下さいといふ、手不足なるを知れり、／十時／おなつ子来る直帰る、／十時十分／おとさん来たら……／十時二十分／藤巻の叔父君来る病人呼ばぬに返事をなす、／或はハハァーと答ふ／「出来ますがよほどらくに」と問なきに答ふ、／叔父深沢に行かる／え…其時—あげます、／「さよ……」／十時半、来らる（叔父）／帰らぬことを求む 三十五分再び深沢に帰る、／「ハアハ…醬油入れてかけて置けば一人で…／先生々々、先生おいでせう」ハサ…先生／せき有り／サウダモナス／今それ……／貞三さん／十時半昌寿さん来る、／十二時中食粥一膳強を食す、／東海君来る／清水と十二丁目に手紙を届ける手配を頼む、／十二時二十分／寒いといふ、毛布をかけてやりぬ／「さんびか」を口に押しつけて下さい／一時五分前／「さよ さよ——」 まだ来ません／「こゝに金をおいてあとでまた無いのこのといふから／しまつておいで下さい 私着物を着たりぬひだりす／るに容易でないから」／「起きる気なればのまねばなりませんね」／大便取ったのは無かったべなし、／一時五分／あねさん——だれ■／ハア…ハア…と微笑／お良さん…／かふしてからゆすぐにいゝだなす／毎晩先づ…／多祈子ネマキを出せしにさかぬ様にせよ／一時十五分／ハア イ、エ コレハ又… ハア／お■■■事に——／あねさんさ…／下帯ばかりも——ぬって呉ればいいな／あらかたいゝしか／一時二十分／キリストを信ずることが第一です／一時四十分／如何にしても生きる方法なきやと問ふ／誰人も知らず キリストを信ずることが真正に生きることよ／さうですなといへり／一時五十五分／何も心配することはない／二時 太田大二郎さん来る／二時十分 姉八重子来る／二時半／苦しい苦しい／名を呼んだら予を見る／見えるかと問へば 見えます、／二時四十分／照井先生母堂来る／よほどよい ありがたう 扇いであけて下さい／休ませ申せ お前も休め／二時四十五分／面白かったことや／お陰さんで／二時五十分より五十五分まで静かにす、／三時／肉体苦しいだらうが然し心は楽しいだらう／そうでごあんす／神様のお恵みだといふや 独にて／主よみもとに近かん／主よ主よきき玉

へ／くだけし心のねぎごとを／どうぞ天国に／やつて下さい／おつささんも居る／三時十五分／再び静肅に帰る／三時二十分／おとさんも見える多祈子も見えると微笑す、／三時半／平野医師来る、水薬を二三匙服用す／三時五十分呼吸変調／主よみもとにのさんび／歌／三時五十五分／ア、と一声の下に絶命す／我等一同泣く／（後略）

少々引用が長くなったが、以上は宗次郎の最初の妻スエが亡くなった当日の日記である。8月19日の午前2時40分から亡くなる午後3時55分までの間、病の床に臥せるスエが口にしたもの、発した言葉、面会に訪れた人物とのやりとり、夫である宗次郎との会話、絶命する瞬間の様子などが記録されている。

次に同日の「自叙伝」の記述を見ていく。

○二荊自叙伝〔大正元年8月19日〕

八月十九日月、午前二時四十分 少量の水を飲む／午前三時、讀美歌二二八「ほろぶる此の世」を歌うて聞かす。／パインアップルの汁を飲む／三時十五分 讀美歌二九二、世の樂みを妻も共に明かに声をあげて全部歌う／三時十八分、“孝詮さんに言つてやつて下さったでしょうな”／三時廿五分、パインアップルの汁を用う。“オバァさん（小田代）にも■■■■（賢三妻）にも／上げよ夜遅くまで世話して下さつて腹が透いたでしょう。”／三時三十五分、水薬を土瓶にて呑む。／三時四十分、水二匙を呑む、“水は旨い”と言う。／四時、多祈子を床より起して病母を呼ばしむ。母は“ウウ”と明かに答う／見ゆるやと問えば“見えるて見えるて”と答う。／四時五分 口を漱ぐ／四時半 小田代老姉帰り、五時 みよ子来る。六時■■■■帰る。／六時十分 朝食 みよ子給仕。六時五十分 牛乳を呑む／午前八時頃まで昏睡状態、時々言を發し“おつやさん”と高きいう“吹張に布を…”／八時三十分、平野医師来り脈を見、胸を見、足部を見る。／本人に対しては“大事なし次第によくなる”といい 密かに実状を伺ひし予に／対しては“今日の容態は頗る異なる、今明日は大切です”“お勞りなさい”という、／本人は薬を飲みしを忘れ再び求む、／時々手を延して空を掴まんとす。／九時半、予に向つて配達に行つて下さいという、手不足なる

を知る為である。／実に殊勝のことである。
夫を思い職業を尊ずる精神である。／十時、
おなつ子来り直ぐ帰る。／十時十分、“お
父オさん来たり……”／十時二十分、
藤巻の叔父君来る 病人は呼ばぬに返事を
 なす、／或はハハア—と答う、“出来ま
すがよほど楽に”と問わぬに答う。／叔父君
去って深沢に行かる。“え…其時—あげま
す。 さよ……”／十時半、叔父君再び来
る、“帰らぬように”求めたが又も深沢に
 行く、／“ハア…醬油入れてかけて置けば
ひとりです”／“先生々々、先生おいで
しょう、…先生”／咳嗽あり。“そう
です”“今それ… 貞三さん”／十時半過ぎ
兄の昌寿さん来る、（幸、雄山寺の法要
 に来て居った）／十二時中食、粥一膳強
を食す。／東海君来る、清水と十二丁目（照
 井家）に手紙を届ける手配を頼む／午後零
時二十分、“寒い”という毛布をかけてやっ
 た。／“「さんびか」を口に押し付けて下
さい”／午後一時、“さよ さよ”まだ来
 ません。／“此処に金を置いて あとで又
無いのこうのというから仕舞って置いて下
さい。 私着物を着ったり脱いだりするに
容易でないから”／“起きる気なれば飲ま
ねば（薬）なりませんね”／“大便取った
のはなかったでしょうね”／一時五分、“あ
ねさん——だれ！ ハア…ハア”と微笑／
 “お良さん… こうしてからゆすぐといい
です”／“毎晩先ず……”多祈子寝巻を
出せしに“さかぬ様にせよ”／一時十五分、
 ハア イ、エ コレハ又……ハア／“あ
ねさん……下帯ばかりもぬってくれ、ばい
いな”／一時二十分、“キリストを信ずる
事が第一です”／一時四十分、“何として
も生きる方法はないのか”と問う。誰人も
 知らず キリスト／を信ずることが真正に
生きることよと云えば／“そうてずな”と
 首肯く、／一時五十五分 “何も心配する
ことはない”／二時、太田大次郎兄来り
二時十分 姉八重子来る、／二時半、苦し
い／妻の名を呼んだら予を見つめ
る、／“見えるか”と問えば“見えます”
 ／二時四十分 照井先生の母堂来る、／
 “よほどよろしい、有りがたう、暑いから
扇いであげて休ませ申して／下さい”と親
 切を表す、母堂は“お前も休めよ”という
 ／二時四十五分、“面白かったこと…お蔭
さんで” 二時五十分より数分間静かにして

居った。／三時。“肉体は苦しいだろうが
然し心は楽しいだろう”と云えば／そう
です。と答う。／予は“これは皆神様の御恵
みだ”と諭すや妻は独にて／主よみもとに
近かん……／主よ主よき、玉え／くだけし
心のねぎごとを／神様 どうぞ天国にやっ
て下さい アアメン／おつさんも居る／と
驚嘆感謝に堪えざる光景を示したので予は
感に打たれ 信仰の／勝利にキリストの憐
憫を仰ぎ奉った。／三時十五分 再び静肅
 に還る。／三時二十八分、お父オさんも見
 える多祈子も見えるとて微笑す。／三時半、
平野立乾医師来診。水薬を二三匙服用／三
時五十分、呼吸変調。／三時五十五分、／
 ○主よ、この霊をあなたの御手にさ、げま
す アーの一声の下に／末期の輝きを遺し
て 豊かなる召命に応じ去った、／臨終を
看守りし一同 泣く。／予は最早此世に於
ては 汝と相見 相語り相祈る一瞬間もない、
 されど／汝は 愛子と共に 主の祝福裕かなり
し生涯なるを見て感謝に堪えない／もの
 である。予は今より後、汝等を救い給いし
十字架のキリストの福音／を佩びキリスト
と偕に永久に前進を賜わるであらう。ハレ
 ルヤ／（後略）

日記も「自叙伝」も、スエが亡くなるまでの
 内容はほぼ同じだが、日記では動作主が曖
 昧だった部分が、自叙伝では主語が補われた
 り、あるいは“”を付けて人物の発言である
 ことを強調することによって、内容がわかり
 やすくなっている。日記では一部方言で記さ
 れているスエの言葉も、自叙伝の方では標準
 語に直されている。こうした加筆修正は、ス
 エの臨終の場面で顕著になる。

「予は“これは皆神様の御恵みだ”と諭す[い
 う]や妻は独にて主よみもとに近かん……主
 よ主よきたまえ くだけし心のねぎごとを
 神様どうぞ天国にやって下さい アアメン
 おつさんも居る と驚嘆感謝に堪えざる光
 景を示したので予は感に打たれ信仰の勝利に
 キリストの憐憫を仰ぎ奉った 三時十五分
 再び静肅に還る 三時二十分 お父オ[と]
 さんも見える多祈子も見える[と微笑せり]
 三時半 平野立乾医師来診[来る] 水薬
 を二三匙服用[す] 三時五十分 呼吸変調
 三時五十五分 主よこの霊をあなたの御手
 にささげます アーの一声の下に末期の輝き
 を遺して豊かなる召命は応じ去った[絶命

す」 臨終を看守りし〔我等〕一同泣く。予は最早此世に於ては汝と相見相語り相祈る一瞬間もない、されど汝は愛子と共に主の祝福裕かなりし生涯なるを見て感謝に堪えないものである。予は今より後、汝等を救い給いし十字架のキリストの福音を佩びキリストと偕に永久に前進を賜わるであらう。ハレルヤ」

(※太字は加筆。[]内は削除部分)

自分の天命を悟って静かに終わりの時を待つスエと、その傍らで見守る宗次郎。「自叙伝」では上記のような加筆修正によって、スエの臨終が宗教的なものとして演出されている。

今回取り上げた大正元年8月19日の記述は一例に過ぎないが、自叙伝における日記の内容の加筆は、単に内容をわかりやすくするためだけではなく、キリスト教徒斎藤宗次郎の自伝であること、さらには自身の信仰心を強調するための演出の役割もあるのではないだろうか。

おわりに

斎藤宗次郎の日記と「自叙伝」について、簡単ではあるが、それぞれの資料の概要とともに、大正元年8月19日の記事を一例として双方の内容の違いについて紹介した。

宗次郎の日記類は翻刻出版されていないものの、「二荊自叙伝」については、大正10年(1921)から同15年分までの内容が、栗原敦氏と山折哲雄氏の編により岩波書店から刊行されている。上巻と下巻の山折氏・栗原氏それぞれの解題には、斎藤宗次郎の人物像や、日記と「二荊自叙伝」の概要、宮沢賢治と宗次郎との交流、内村鑑三と宗次郎との関わりなどについて触れられている。

栗原敦氏が「これが単なる資料としての意味に留まらない、いわばタイムマシン斎藤号とでも言うべきものとして、私たちが当時の生きた時代に運んでくれるものであるを痛感させられる」⁽¹⁰⁾と述べているとおり、宗次郎が残した日記と自叙伝は明治・大正・昭和という時代の様子を今に伝えてくれる好資料であることは間違いない。特に、宗次郎が花巻の地を去る大正15年(1926)までのものは、近代化していく花巻の様子が詳細に記されていることから、花巻の近代史を研究する上でも重要な手がかりとなるだろう。また、同氏が「斎藤宗次郎その人についての研究は、厳密な事実の検証がまだまだ不足した状態であ

る」⁽¹¹⁾と述べるように、宮沢賢治や内村鑑三との関わりで注目されてきた宗次郎だが、斎藤宗次郎という人物そのものについてはまだ知られていない部分が多いのではないだろうか。

本稿のような、日記と「自叙伝」を比較検討する研究を進めていくことは今後の課題の一つといえるだろう。両者の比較によって、斎藤宗次郎という人物の行動や思考について、より深い理解を得られることから、確かな斎藤宗次郎像を知ることができるのではないだろうか。

また、記録魔宗次郎の残した数々の記録に頼りがちである宗次郎研究だが、内村鑑三をはじめとする関連人物の手による記録(日記や書簡など)を調査研究することも必要であろう。このことによって、斎藤宗次郎という人物をより多角的に捉えられるはずである。

斎藤宗次郎の日記を読み解くことによって、宗次郎自身だけでなく、近代花巻やそこに生活していた人々の様子が蘇ることを期待してやまない。

最後に、貴重な資料をご寄贈いただいた斎藤宗次郎のご家族の皆様に、改めて感謝申し上げます。

(註)

- (1)山本泰次郎『内村鑑三とひとりの弟子—斎藤宗次郎あての書簡による—』13頁
- (2)同前 14頁
- (3)同前 13頁
- (4)「随順日記」大正4年10月4日
- (5)「随順日記」大正12年1月2日
- (6)斎藤茂夫編『魅りの朝を望みて—斎藤宗次郎追憶集』71頁
- (7)「吾家の歴史」明治33年12月歳末雑感
宗次郎はこれ以降「西東二荊」を名乗るようになる。
(「西東」は「西半球東半球=世界市民」の意)
- (8)「二荊自叙伝」第1巻1-2頁
- (9)明治40年(1907)2月以降の記事は「彼」と「予(余)」どちらも使われているが、次第に「予」で統一されていったようである。
- (10)『二荊自叙伝(下)』解題 x x 頁
- (11)同前 解題 x x x i 頁

◎主要参考文献

- 斎藤茂夫編『魅りの朝を望みて—斎藤宗次郎追憶集』(私家版、1968年9月)
- 山本泰次郎『内村鑑三とひとりの弟子—斎藤宗次郎あての書簡による—』(教文館、1981年4月)
- 栗原敦・山折哲雄編『二荊自叙伝(上)』(岩波書店、2005年3月)
- 栗原敦・山折哲雄編『二荊自叙伝(下)』(岩波書店、2005年6月)
- 『花巻の先人シリーズ(1) 斎藤宗次郎』(花巻市博物館、2019年3月)

表1 斎藤宗次郎日記一覧

	表 題	年 代	備 考
1	吾家の歴史	明治31年（1898）4月1日～12月31日	
2	吾家の歴史	明治32年（1899）1月1日～12月31日	
3	吾家の歴史	明治33年（1900）1月1日～12月31日	
4	吾家の歴史	明治34年（1901）1月～12月	各月の概要のみ
5	吾家の歴史	明治35年（1902）1月1日～12月31日	
6	吾家の歴史	明治36年（1903）1月1日～12月31日	
7	吾家の歴史	明治37年（1904）1月1日～11月27日	
8	来往日記	明治37年（1904）1月1日～12月31日	
9	吾家の歴史	明治37年（1904）11月28日～同38年（1905）12月31日	
10	来往日記	明治38年（1905）1月1日～12月31日	
11	来往日記	明治39年（1906）1月1日～12月31日	
12	吾家の歴史	明治39年（1906）7月15日～8月9日	教友会夏期懇話会の記録
13	吾家の歴史	明治39年（1906）1月1日～12月31日	
14	吾家の歴史	明治39年（1906）	愛子（6才）の手習いと落書き
15	吾家の歴史	明治40年（1907）7月27日～8月10日	第二回夏期懇話会の記録
16	吾家の歴史	明治40年（1907）1月1日～12月31日	
17	吾家の歴史	明治41年（1908）1月1日～12月31日	
18	吾家の歴史	明治41年（1908）5月18日～同42年（1909）1月4日	愛子（8才）の日記
19	吾家の歴史	明治42年（1909）1月1日～12月31日	
20	往来日記	明治40年（1907）～同42年（1909）12月31日	
21	吾家の歴史	明治43年（1910）1月1日～12月31日	
22	来往日記	明治43年（1910）1月1日～12月31日	
23	来往日記	明治43年（1910）1月1日～12月31日	
24	吾家の歴史	明治44年（1911）1月1日～12月31日	
25	吾家の歴史	明治45年（1912）1月1日～大正元年（1912）12月31日	
26	日誌	大正2年（1913）1月1日～12月31日	
27	日記	大正6年（1917）1月1日～同7年（1918）2月10日	未製本, 来往日記
28	日誌	大正3年（1914）1月1日～12月31日	
29	随順記	大正4年（1915）1月1日～12月31日	
30	随順記	大正5年（1916）1月1日～12月31日	
31	随順日記	大正6年（1917）1月1日～12月31日	
32	随順日記	大正7年（1918）1月1日～12月31日	
33	往来日記	大正7年（1918）2月11日～同8年（1919）3月25日	
34	随順記	大正5年（1916）1月1日～同6年（1917）1月7日 同8年（1919）3月26日～10月31日	未製本 来往日記の部と記載
35	随順日記	大正8年（1919）1月1日～12月31日	
36	随順日記	大正9年（1920）1月1日～12月31日	
37	随順日記	大正10年（1921）1月1日～12月31日	
38	随順日記	大正11年（1922）1月1日～12月31日	
39	随順日記	大正12年（1923）1月1日～12月31日	
40	来往日記	大正12年（1923）7月24日～昭和2年（1927）12月22日 同3年（1928）5月31日～12月15日 同4年（1929）5～8月	
41	随順日記	大正13年（1924）1月1日～12月31日	
42	随順日記	大正14年（1925）1月1日～12月31日	
43	随順日記	大正15年（1926）1月1日～6月30日	
44	随順日記	大正15年（1926）7月1日～昭和元年（1926）12月31日	
45	随順日記	昭和2年（1927）1月1日～6月30日	
46	随順日記	昭和2年（1927）7月1日～12月31日	
47	随順日記	昭和3年（1928）1月1日～6月30日	
48	随順日記	昭和3年（1928）7月1日～12月31日	
49	随順日記	昭和4年（1929）1月1日～6月30日	昭和3年10月と11月記事も一部混入
50	随順日記	昭和4年（1929）7月1日～12月31日	

	表 題	年 代	備 考
51	随順日記	昭和5年(1930)1月1日～6月30日	冒頭部分に来往日記
52	随順日記	昭和5年(1930)7月1日～12月31日	
53	来往日記	昭和6年(1931)1月1日～4月30日	一部年代の違うもの混入
54	随順日記	昭和6年(1931)1月1日～6月30日	
55	随順日記	昭和6年(1931)7月1日～12月31日	
56	随順日記	昭和7年(1932)1月1日～6月30日	
57	随順日記	昭和7年(1932)7月1日～12月31日	
58	随順日記	昭和8年(1933)1月1日～6月30日	
59	随順日記	昭和8年(1933)7月1日～12月31日	
60	随順日記	昭和9年(1934)1月1日～6月30日	
61	随順日記	昭和9年(1934)7月1日～12月31日	
62	随順日記	昭和10年(1935)1月1日～6月30日	
63	随順日記	昭和10年(1935)7月1日～12月31日	
64	随順日記	昭和11年(1936)1月1日～6月30日	
65	随順日記	昭和11年(1936)7月1日～12月31日	
66	随順日記	昭和12年(1937)1月1日～6月30日	
67	随順日記	昭和12年(1937)7月1日～11月30日	
68	随順日記	昭和12年(1937)12月1日～同13年(1938)6月30日	
69	随順日記	昭和13年(1938)7月1日～12月31日	
70	随順日記	昭和14年(1939)1月1日～6月30日	
71	随順日記	昭和14年(1939)7月1日～12月31日	
72	随順日記	昭和15年(1940)1月1日～6月30日	
73	随順日記	昭和15年(1940)7月1日～12月31日	
74	随順日記	昭和16年(1941)1月1日～5月31日	
75	随順日記	昭和16年(1941)6月1日～12月31日	
76	随順日記	昭和17年(1942)1月1日～6月30日	
77	随順日記	昭和17年(1942)7月1日～12月31日	
78	随順日記	昭和18年(1943)1月1日～5月31日	
79	随順日記	昭和18年(1943)6月1日～12月31日	
80	随順日記	昭和19年(1944)1月1日～12月31日	
81	随順日記	昭和20年(1945)1月1日～12月31日	
82	随順日記	昭和21年(1946)1月1日～12月31日	
83	随順日記	昭和22年(1947)1月1日～12月31日	
84	随順日記	昭和23年(1948)1月1日～12月31日	
85	随順日記	昭和24年(1949)1月1日～12月31日	
86	随順日記	昭和25年(1950)1月1日～5月31日	
87	随順日記	昭和25年(1950)6月1日～12月31日	
88	随順日記	昭和26年(1951)1月1日～6月30日	
89	随順日記	昭和26年(1951)7月1日～12月31日	
90	随順日記	昭和27年(1952)1月1日～5月31日	
91	随順日記	昭和27年(1952)6月1日～12月31日	
92	随順日記	昭和28年(1953)1月1日～6月30日	
93	随順日記	昭和28年(1953)7月1日～12月31日	
94	随順日記	昭和29年(1954)1月1日～6月30日	
95	随順日記	昭和29年(1954)7月1日～12月31日	
96	随順日記	昭和30年(1955)1月1日～5月31日	
97	随順日記	昭和30年(1955)6月1日～12月31日	
98	随順日記	昭和31年(1956)1月1日～12月31日	
99	随順日記	昭和32年(1957)1月1日～6月30日	
100	随順日記	昭和32年(1957)7月1日～12月31日	
101	随順日記	昭和33年(1958)～同42年(1967)	未製本
102	随順日記	昭和34年(1959)9月1日～10月31日	未製本

原本は花巻市博物館所蔵

表2 二荊自叙伝一覧

	表 題	年 代	備 考
1	二荊自叙伝1	明治10年（1877）2月20日～同32年（1899）4月7日	
2	二荊自叙伝2	明治32年（1899）4月8日～同34年（1901）3月18日	
3	二荊自叙伝3	明治34年（1901）3月19日～同36年（1903）5月3日	
4	二荊自叙伝4	明治36年（1903）5月4日～同37年（1904）5月19日	
5	二荊自叙伝5	明治37年（1904）5月21日～同39年（1906）4月11日	
6	二荊自叙伝6	明治39年（1906）4月14日～同42年（1909）4月1日	
7	二荊自叙伝7	明治42年（1909）4月2日～同44年（1911）7月24日	
8	二荊自叙伝8	明治44年（1911）7月25日～大正2年（1913）9月27日	
9	二荊自叙伝9	大正2年（1913）9月28日～大正4年（1915）4月4日	
10	二荊自叙伝10	大正4年（1915）4月4日～同6年（1917）4月6日	
11	二荊自叙伝11	大正6年（1917）4月8日～同9年（1920）5月20日	
12	二荊自叙伝12	大正9年（1920）5月21日～同11年（1922）5月3日	
13	二荊自叙伝13	大正11年（1922）5月4日～同12年（1923）6月3日	
14	二荊自叙伝14	大正12年（1923）6月12日～同13年（1924）3月5日	
15	二荊自叙伝15	大正13年（1924）3月8日～同14年（1925）2月12日	
16	二荊自叙伝16	大正14年（1925）2月13日～同15年（1926）2月16日	
17	二荊自叙伝17	大正15年（1926）2月18日～8月7日	
18	二荊自叙伝18	大正15年（1926）8月8日～昭和2年（1927）2月15日	
19	二荊自叙伝19	昭和2年（1927）2月16日～11月6日	
20	二荊自叙伝20	昭和2年（1927）11月11日～同3年（1928）5月6日	
21	二荊自叙伝21	昭和3年（1928）5月9日～10月23日	
22	二荊自叙伝22	昭和3年（1928）10月23日～同4年（1929）3月1日	
23	二荊自叙伝23	昭和4年（1929）3月1日～11月4日	
24	二荊自叙伝24	昭和4年（1929）11月4日～同5年（1930）3月24日	
25	二荊自叙伝25	昭和5年（1930）3月24日～9月27日	
26	二荊自叙伝26	昭和5年（1930）9月27日～同6年（1931）2月24日	
27	二荊自叙伝27	昭和6年（1931）2月26日～9月1日	
28	二荊自叙伝28	昭和6年（1931）9月5日～同7年（1932）2月29日	
29	二荊自叙伝29	昭和7年（1932）3月1日～8月18日	
30	二荊自叙伝30	昭和7年（1932）8月19日～同8年（1933）3月10日	
31	二荊自叙伝31	昭和8年（1933）3月11日～10月22日	
32	二荊自叙伝32	昭和8年（1933）10月23日～同9年（1934）3月13日	
33	二荊自叙伝33	昭和9年（1934）3月13日～11月18日	
34	二荊自叙伝34	昭和9年（1934）11月19日～同10年（1935）7月7日	
35	二荊自叙伝35	昭和10年（1935）7月7日～同11年（1936）1月1日	
36	二荊自叙伝36	昭和11年（1936）1月1日～10月11日	
37	二荊自叙伝37	昭和11年（1936）10月11日～同12年（1937）3月31日	
38	二荊自叙伝38	昭和12年（1937）4月1日～11月10日	
39	二荊自叙伝39	昭和12年（1937）11月10日～同13年（1938）4月7日	
40	二荊自叙伝40	昭和13年（1938）4月7日～12月25日	

原本はNPO法人今井館教友会所蔵

花巻市博物館研究紀要

第17号

令和4年3月30日 印刷

令和4年3月30日 発行

発 行 花 巻 市 博 物 館

〒025-0014

花巻市高松第26地割 8 - 1

TEL 0198-32-1030

印 刷 八 重 櫨 孔 版 社

〒025-0071

花巻市愛宕町 8 - 8

TEL 0198-23-2544

©花巻市教育委員会

**Research Bulletin
OF
HANAMAKI CITY MUSEUM**

- A Study of Archaeological Sites in the 12th Century in Hanamaki
City and Kitakami City, Nishiwaga Town
..... Jun MURATA (3)
- Tokan Tada's Footprints in Hanamaki :
Reading His Diaries, "Kannon-do records", and Letters
..... Kasumi MATSUHASHI (15)
- A Stone Buddhist Statue in Sakuramachi Ichiro FUDAI (25)
- A Study on the Sojiro Saito's Diaries and Autobiographies :
Taking the Article dated 19 August 1912 as an Example
..... Tomoe KODASHIMA (29)

EDITED
BY
HANAMAKI CITY MUSEUM